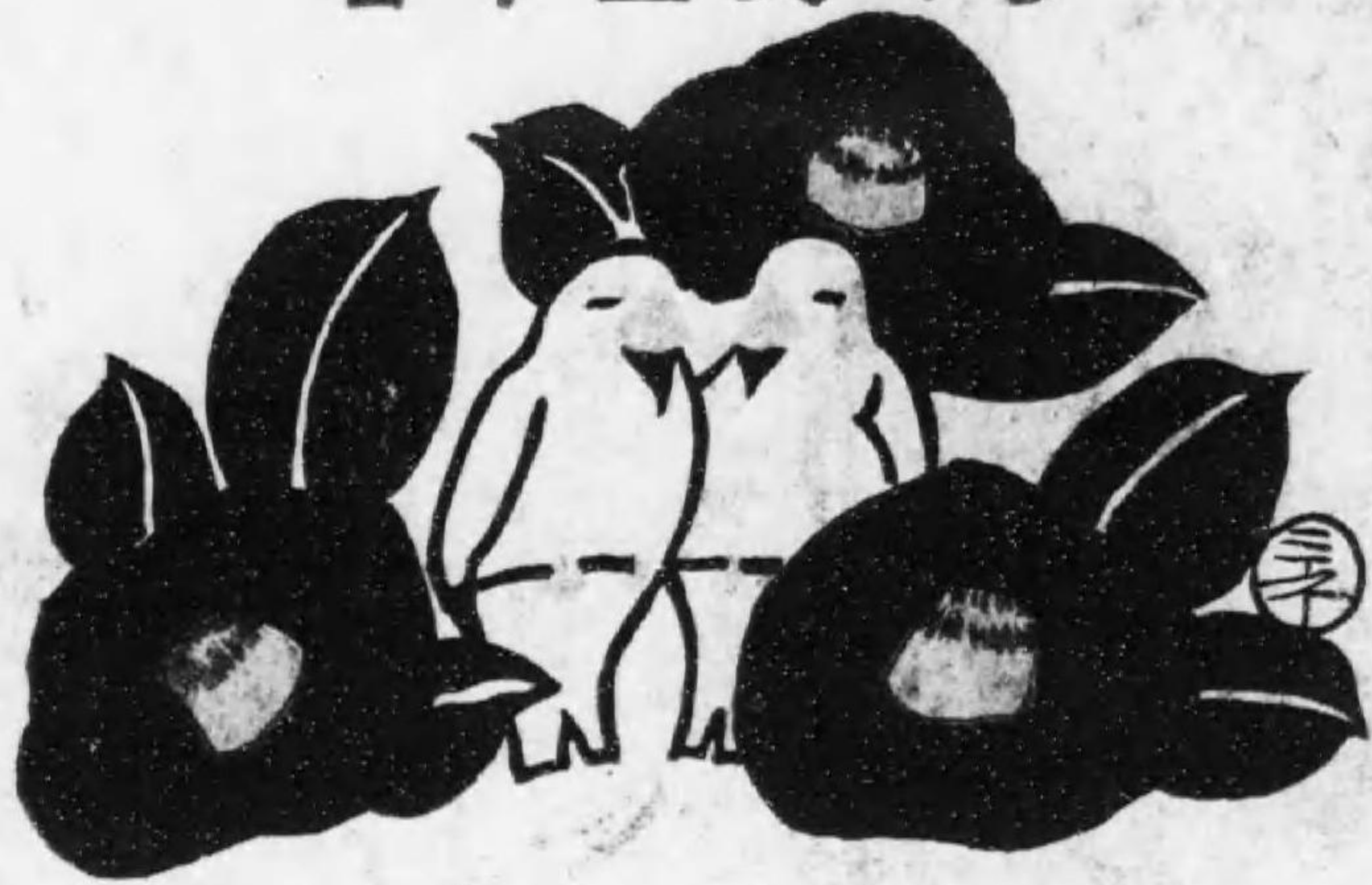


著平三良々多



御存じ無かる

お釋迦
ても



始



打 110
116



著 平 三 良 々 多

様 迦 釋 お
も で
ろ か 無 じ 存 御

大 正
8. 12. 26
内 交

幀 裝 伯 画 大 額 丸 犬







お釈迦様でも御存知なかる

目次

とん子と俺の新婚旅行……………〔一〕

- ▽貴下妾の生命よ、イロ、
- ▽奴、確かに憤慨してる
- ▽稲毛といふところ
- ▽逆さまにドブナー
- ▽ロメオとジュリエット
- ▽湖月の宴會
- ▽答は常に『呔』である
- ▽お、蠅螂、汝は孫武の化身
- ▽握手しませう、さドツコイ

隣家の鶏.....【五四】

- ▽變妙な鶏の餌料
- ▽名著『鶏を飼うて五十年』
- ▽地玉子製造法
- ▽家主といふ類の人間
- ▽お釋迦様でも氣が附くめエ

金 策.....【八一】

- ▽ムツ々五百圓あれば
- ▽特別方略と其の役割
- ▽高井利之助氏を迎ふ
- ▽是からが一騎打
- ▽飛んだ張良

成る程御名案.....【二四】

- ▽保険屋に責められて
- ▽俺の叔父の失敗ばなし
- ▽あの、三萬圓！。

とん子の外交術.....【二九】

- ▽俺の妻君は賢夫人
- ▽是にはいろいろ事情がある
- ▽往こか往くまいか思案橋
- ▽それ、人形ぢやないか
- ▽妾、外交術が巧いでせう
- ▽陸軍中將閣下
- ▽俺は知らぬよ、責任はないよ
- ▽是非伺はれて堪るものか

鼻眼鏡の宙返り.....【一四〇】

- ▽外國風俗

- ▽ドリーモ忙しくつてね
- ▽妙な病氣の代議士
- ▽物の賞め方
- ▽鼻眼鏡の宙返り
- ▽飛ぶ、飛ぶ、帽子が風に

白石と黒石と……

(三三)

- ▽壽司は立つて食ふもの
- ▽洋服を着る者の苦痛
- ▽仕掛は屋臺の裏

従軍記章……

(三六)

- ▽開けるぞ、最敬礼オイ
- ▽記念撮影中止!
- ▽やあーい汚穢屋の勳章

目次終

- ▽予は如何にして従軍章を得たるか
- ▽慌てるべき筋合のこと
- ▽憲兵隊から『一寸来い』
- ▽ヒヤリーズ征伐
- ▽否、サッは申上げません

お釋迦様でも御存知なかる

多々良三平著



新婚旅行

◎貴下、妾の命よ。イヒ、

「病氣ニ付醫師ノ勸告ニ從ヒ兩三日轉地靜養致シ度云々」といふ缺勤届を社に出し、宅の方へは、

「社用にて急に三四日名古屋方面へ出張す、火の要慎專一のこと」
 てな奴を一枚投げこんで、汽笛一聲兩國停車場を出發して、俺とと
 ん子とは相携へて稻毛遠征と洒落こんだ。君知つてるだらう新橋の
 とん子を！、今は最早好い中婆さんだが一時は素的に賣つた藝妓さ
 無論此の俺と深く交際するくらゐの女だもの、第一流の藝妓に極ま
 つてゐる。俺は第一、女の江戸ッ兒であることが嬉しかつた、氣前の
 いゝとん子は、貧乏な俺に向つて曾て一度も玉や祝儀を拂はせたこ
 とがない。而も其の言ひ草が氣に入つた、
 「貴下一人が面白いんぢやない、妾だつて面白いんですもの、玉や
 祝儀を戴く理由はありませぬわ」だと。

待合の勘定だつて然うだ、前の月に俺が拂へば、翌月は屹度、
 「女將さん、妾多々良さんからお勘定を預つて居てよ」。
 てなことを云つて拂つてあつた。變な咳するね、君肺病ぢやないか
 え？。

それから高等の教育を受けてゐることゝ、素人臭い扮装に巧であ
 つたこと、此の二點が又俺を力強く彼の女に向つて引付け、實に前
 後六年の久しきに亙つて、深厚なる交情を繼續せしめた所以である
 若し彼の女が、如何にも妾は天下の藝妓でございてな顔をして、ぞ
 ろくして歩く女だつたら、如何にそれが我が親愛なるとん子さん
 であつても、俺は一緒に出かけること丈は三舍を避けたに相違ない

若し又彼の女が、芝居の語とお客の品定めより外に、何の話材をも持たないやうな月並の藝妓であつたら、恐らく俺は二度以上拜謁の光榮を御辭退したであらう。實に彼の女は三田の佛和女學校の卒業生であつた——彼は母校の恥辱だと云つて、深く之を秘して居たが只是だけでも彼の女の數奇な運命の一端が窺はれる如く、俺は淡い戀以外に、彼の女の境遇に對しても深い同情を持つて居たんだ。斯ういふ可憐な女を幾分でも慰藉してやることは、男子としての高尚な義務であると考えたのである、況んや於てをや、

「貴郎は妾の生命よ、貴郎無くては妾は一日も生きちや居られないわ」

てな事を、イヒ、、、云はれるんだものを。何だツて？、ア、よろしいお手柔かにやるよ。

それはとん子と相知り初めてから、漸く三月ほごを経た頃のこと、七月初旬暑氣日増しに相加はり候ふ時分であつた。

『行きたいわネ何處へ、餘り遠くない一晩どまり位のところ、静かな——海岸が好いわ、一寸でも旅に出るつていふものは、氣分がかわつて情の深くなるものよ。』

と或る日、とん子は斯う云ひ出した、俺に異論のあるべき筈はないが、餘り『賛成！』の安賣をしちや估券に關はると思つたから、

「悪かないな、新婚旅行ツていふ所だな、エ、と、コウツと、今度

の日曜は何も用事は無かつたかしら……。」

と一寸景氣づけに考へるやうな態をして見せた、自慢ぢやないが日曜だつて月曜だつて、俺は用事などのあつた例のない人間である。

「日曜？、日曜は駄目よ。」

「どうしてだい。」

「だつて日曜は、人が澤山出かけるでせう、貴郎の知つた人も、妾の知つてるお客様も……、丸鬚か何かで濟まして歩いて居るところを發見たら、事だわよ。日曜でなくなつて、一日や二日社の方は何うにだつてなるでせう。」

ウン其れは何うにだつてなるさ、でなくなつてちよいと失敬す

るんだもの、だけど然う無遠慮に切出されちやア、彌く以て安く簡単にオーライと云ふ譯に行かぬではないか。

「さうは行かないよ、これでも幹部の一人なんだからね。」

と一寸反り返つて見る、だが頓斗利き目はない、

「嘘お吐きなさい。一日二日は愚ろか、未來永切、貴下なんぞ居たつて居なくなつて何方だつて關やしないんだわよ、妾こそ商賣を休んで行くんぢやありませんか。心の中ではヒヤ大賛成と云つて居ながら、一寸その勿體ぶつてみるんでせう、悪い癖だわよ。明後日行くことに定めてよ、ねエ好いでせう下積幹部さん！」

には恐れ入つた。斯くの如くにして、茲に前記のハガキが飛ぶこ

と、相成つた次第である。

◎奴、確かに憤慨してる

別々に切符を買つて、改札場も別れ別れに出て汽車に乗つてからビタリとゴビリ付いて座つた。何でも奴、素的な扮装をして、一瓶七八圓(其の頃)もしようと云ふ香水を、ブンブン香はせてゐた。而して二人押並んで腰かけた所は、何處の華族様の若夫婦かと疑はるゝばかりであつた。若し時の時詩人若しくは文士と名のつく人間が此の状を目撃したならば、月宮殿の桂男と龍宮の乙姫の新婚旅行とも見たであらう、或ひは業平と小町の再来とも形容したであらう、或ひは三月雛の内裡様奥様の抜け出でしとも疑つたであらう、妙く

も同室の客を、羨みと妬みの爲めに悶殺せしめたことは確かである。向ふ例の端に腰かけてゐる男が、新聞を讀む態をしながら、忌々し相な顔をして、ちよいと此方を盗み見る毎に、俺はゾクゾクと嬉しなかつた。

(奴確かに憤慨して居らッしやるに相違ない)

と思つた。俺は何うしてだか、俺のよりかも綺麗な妻君を持つてゐる奴を見ると、妙に癢に障つて堪らない、何とか因縁をつけて横ツ面の一つ位張り飛ばしてやり度いやうな氣がする。彼の男だつて屹度左様であるに違ひない、然らば彼の男も亦俺が毎度もやるやうに、家へ歸つてから熟々と、人丸が田子の浦に打出でた時のやうな

態で、妻君の顔を眺めながら、

(何てまづい黒い面だらう。)

と不満！憤激の情遣るに所なく、罪もないのに剣突を食はせて、その妻君をオドオドさせるに相違ない、と考へると些か惻陰の情が起らんでもない。俺はおもむろに衣囊から他所行の金口を一本取出して静かにくゆらし始めた(成るべく其れが長く保つ如うに、極く静かに、寧ろたゞ口に唾へてゐると云ふ程度に)。佳い煙草に限つて喫んでゐる御自身よりも、傍に居る者の蒙むる恩恵が大きいものだ、とん子は咽喉をゴツ／＼させてゐるらしかった。

でも感心に、

(二ぶく頂戴、その喫みかけが好いわ。)

てな事は云はなかつた、汽車の中で巻煙草をスバルなどは、藝妓の類のすることだもの。話の種はないし煙草は喫へないし、とん子は仕様事なしのテレ隠しに、

『まあ靴が汚れたこと、誰かにお踏まれなすつたのね。』

てな事を言つて、香水のブンブンする手巾で靴の泥をはいたり肩の邊のゴミを拾つたり。こりやヤイ好い加減にせいつたら、治安に防害があるッ。

◎稻毛といふところ

汽車は一時間ばかりで稻毛に着いた。丁度正午少し前だつた。

停車場から海岸の旅館へは、畑の中の砂路を通つて行く。俺はあそこが好きだ、其處は春から夏の初にかけて一面の麥畑で、夏から秋へかけては甘藷畑である。廣々とした畑の向ふに松林が連らなつて、其の隙間から旅館の一部が見えたり隠れたりするのも懐かしい、青い麥の波に續いて黄色い菜の花の畑があるのも調和がよい。畑として、色んな物がゴツチャに栽培されてゐない點が、確かに一帯の風致を高雅にしてゐると思ふ。

その時は移植されて未だ間の無い甘藷の苗が、紫色の若い葉をひろげて、畑中を匍ひ廻つて居た。麥や甘藷を専門に栽培する土地に、ろくな土地はないものだ。此處も赤土で、一足毎に灰のやうな

細かい砂がパツバと揚がる。

下したての足袋が、砂に塗れるを氣にしながらともし子は、

「何だか、火鉢の中でも歩いてるやうだわね。」

と笑つた。而して途中でオペラバックの中から、香水のブンブンスる上等の麻の手帛を一枚取出して、俺の洋服のポケットへ捻ぢこんで斯う云つた。

「此方のハンケチを使つて下さいね、各自に異つた手帛を持つて居ては、可怪しいから。」

俺は女の用意の周到なのに敬服しながら、謹んで木綿の而も薄黒くなつた手帛を、ツボンのポケットの奥深く蟄居を命じた。俺が是

日洋服を着て出たのも、實は女の注意であつた、彼の時彼あ云はれなければ、俺は今日は最近新調したばかりの紹の羽織と高貴の單衣の進水式を行つて、得々とやつて來たに相違なかつた……、と云ふは斯ういふ次第である。

「貴郎、明後日は和服で居らッしやいな、ね、好いでせう？」
と、とん子が云つた。勿だ、誰に見せうとて紅漿附けよ、お前に見せ度いばかりに、無理算段してこしらへた着物だものといふ心色にも出さず、

「俺は平常のまんまで行く積りなんだが……。」
てな事で、不性不精その一張羅を着て行く態にしたかつたんだ。處

が、

「平常のまんまで結構よ、たけぞ洋服はお止しなさいな、野暮くさ
いからね。」

とお出なすつた、オヤ／＼だ。平常着の解釋が少々異つてゐる、俺の平常着と云へば事務服兼帯の背廣、和服と云へば三ツいたら具五ツ紋の紹の羽織、ザツツオール、外には寢衣が一枚有るツ限り、旗幟極めて鮮明である。

「ちやア紹の紋付だ、そんなものでもいゝかえ？」

「紋付？……、不可いわ、紋がちがふでせう。」
ギヤフンと參つた。で己むを得ず外には着物を持たぬことを告げ、

序でに、日本人が洋服と和服とを持ち、西洋間の應接室と日本間の客室とを持ち、番茶とコーコーとを飲み、靴を穿き下駄を穿く二重生活の馬鹿さ加減を手痛く攻撃した。即ち俺が着物を澤山持たぬ理由は、敢てそれを作り能はぬからではない、一種の主義からであることを、夫れとなく、彼の女に知らしめることに依つて、紳士の態面を維持せんと欲したのである。兎に角、紋の異つた和服よりかも洋服が好いと云ふことになつた。しかし其の洋服たるや、今日の彼の女の美装に對しては、稍や釣合ひの取れない粗服である、先刻車中に在つて衆人羨望の的となつてゐる間も、視線が注がるれば注がれるほど、俺は只管此の點を顧慮した次第である。尤もそんな事に

長く頭を悩まし拘泥する俺ではない、直ちに頓悟一轉、自から斯う云つて慰めたには慰めたのだ。

一體男が粧して、妻君を穢くして置くのは、見つともないこと此上ないが、妻君を美々しく孔雀の如く飾り立て、亭主は薩摩耕に、烏打帽か何かを被つて、悠然と構えこんで、オイこらてな事を云つて、其の美人を願でしやくつてゐるのは却つて奥床しいものだ。

夫れだ、俺は全く其の主義さ。これで自分だけは安心したけれど、車中の愚物どもが、此の俺の高尙な主義主張を、果して了解しけるか否やが疑問である、

「何てシミツタレた洋服だい、彼れは夫婦ぢや無からう！、書生かな、それとも此頃流行る令嬢と運轉手の駈落かな。」
 なご、考へてゐる血の環りの悪い奴が無いとも限らぬ、一そ此處へ起立つて演説してやらうかと思つたくらゐだ。

俺たちは松林の中の静遊館と云ふ旅館へ行つた。洋服を脱いで浴衣に着換えて、晝飯を食つてから、海岸の方へ散歩に出た。庭の裏の急な小坂を降りると、そこが直ぐ海邊だが、平凡な汚ない海岸である。水は極く浅いらしく、漁夫の子供たちが水の中で蛤を拾つて居た。何とか云ふ一寸した神社が一つある外は、何にも見るべきものゝ無い所だ。

小舟を一隻借りて海へ出る事にした。

◎眞逆様にドファン！

「貴下、漕げるの？」

と、とん子が危ぶむのを、「無論」さとはばかり、三年も船頭をやつて居たんだてな顔をして漕ぎ出した。尤も船に就ては全然無經驗ではない、三四年前の夏のことだ、俺は佃島の海水館といふ旅館に下宿してゐた、その二階からは遙かに房總の連山を遠望し、欄杆の下までヒタ／＼と海水が押寄せてくる、東京の人は餘り知らないが、餘程眺望は秀れた家である。Sと云ふ友人が来て、

「君は、船が漕げるのかい。少し位は？」

と云ふ、全然知らぬと云ふのも見識に關はると思つたから、

「少し位は漕げるさ。」

と答へた。ちやア一つ出かけようと云ふ事になり、宿で小船を一艘借らせて、果物と麥酒を二三本用意して乗出した。俺は無論Sに漕がせる積りで居たんだ、處がSは又Sで、俺に漕がせて自分は林檎の皮ぐらゐを剝いて居る計畫だから始末が悪い。結局二人とも、一寸も漕げないことが判つて、大急ぎで取返さうとした時は、もう遅かつた。流れに乗つた船はドン／＼走り出した。疾走して来る汽船の舳先を横切つて、危ふく轉覆せんとなしたり、汚穢屋の船に衝突けて強たか怒鳴り付けられたりして、とこの詰り水上署の船に曳か

れて歸つて來た、命に別條は無かつたが、眼の玉から火の出る程吐り付けられた。

然しこんな經驗は、敢て誇るに足らんと思つたから、とん子には話して聽かせなかつた。水が浅いんだから愈々動かない時は、降りて押すことだと多寡を括つてゐたのである。

初の内は大分調子が好かつた。水が浅いから櫓を棹の代りにして水底に突立て、グイと力を入れると、船はスーイと進む。ふん、巧いな按じるより産むが安しちやと、スーイスーイとやつた。とん子は俺の手並に悉皆安心したらしく、

「妾、何だか今朝から嬉しくつて堪らないのよ、ホネムーンで斯ん

な氣のするもんでせうか』

と初心な處女の言ひ相な事を言つたり、又

『これが眞實のホネムーンだつたら、もつとどんなにか嬉しいんだけども。』

と軽い不平を訴へたりした。而して巻煙草に火を點けて甘さうに吸つた。

『新婚旅行とは苦しきもの也かね、好きな煙草も喫めないんだから。』と笑ふと、何うです諸君、

『好きな人の爲ですもの、煙草ぐらゐ我慢して上げるわ。』
てな事、一生に一度でいゝから言はせて見度いとは思ひませんか。

其の内に船が突然深海へ出た。砂であつた海底が何時の間にか岩と變り、其の岩が斷崖を成して、急に水が深くなつてゐるのを知らずに、グイと押出してしまつたのである。驚いて淺瀬へ引戻さうとしたが、ドッコイ、櫓を使ふべき處に來ると、櫓と云ふ奴決して俺の命令を肯かない、船の奴が又さうだ、右へ廻さうとすると左を向く、左へ向けようとするると右へ廻る、まるで天氣豫報そつくりだ。『船頭さん何が始まつたの、盟船にでも乗つて居るようね、眼が廻るぢやありませんか。』

タツタ今好きな人の爲ならと云つた癖に。生憎干潮だから、船は沖を指して流れる。かうなるともう夢中だ、蚊のやうな腕に満身の

力を籠めてエイヤ〜。ガタン！ 櫓臍が外れると機をくらッて、ドブン！。

落ちたのは櫓ではない、拙者である。誰だい後ろの方で、漸とこれで溜飲が下つたなご、笑つて居るのは？ 三步前へ出ろッ！。こゝで俺が土左衛門になつたら尙好かるが、生憎泳ぎは水府流の達人だ、水中で手早く浴衣を脱ぎ捨てる、片手で舷を掴み片手で抜手を切つて、船を浅瀬へと引張つて行つた——俺は確かにその通りやつて居たんだが、とん子は俺が鮑のやうにビタリと舷に喰付いたまゝ、手足を百掻きつゝ、船と共にズン〜沖へ流れてゆくものと見て取つたので、狂人のやうに騒ぎ立てた。

濱邊で此の光景を見てゐた漁夫が五六人駆付けて、船は濱邊へ引戻された。脱ぎ棄てた浴衣の奴だけは、素早く姿を晦ませてしまつた。

宿の女將驚いた風で『おや〜まあ左様で……、お怪我がなくて何より結構でございませう、旦那様はなか〜御活潑で居らッしやいますね』とん子スツカリ女房氣取で『エ、それはお茶目さんで仕様がないうですよ』芳子や芳子、此の時ばかりは俺は腹の中で、ピヨコ〜お前にあやまつて居たよ、

（天罰だ、天罰だ。嬢あは知らないでも、天の神様がお罰しなさる。）とな、何ウソなものか眞實だ、俺だッて其の性や善なんだもの。

◎ロメオとジュリエット

たつた今後悔臍を噛んだ女房思ひの男は、裏の小高い松山に行つて、その草の上にながくと寝そべつて日向ぼっこをしながら、派手なバラソルに半身を覆ふて其枕元に座りこんでゐるとん子と、甘い戀の歡樂に酔うてゐた。

ロメオとジュリエットが戀を語り合ふ場の文句を想ひ出して、あんなことを言つた、こんなことも云つた、彼の文句が好きだ、それよりも此方の方が好いてなことを盛んに辯じ立て、ファウストのマガレットなども證人として喚び出された、それからとん子はモンナ・ウンナが好きだといつた。

(妾が貴下だつたら左様はしなかつた。妾の戀を邪魔するどんな大きな障害が出て來ても、「其處をお退き、妾が通るのだから」と云つて、妾はそれを押退けて通ります)

と云ふ彼の強い意志が堪らなく好きだと云ふのである。而して、

「男は戀に向つて、何時も不正直で卑怯なものだわネ。」と攻撃した。俺は又ボルクマンが好きだと主張した、

(俺は確言する、俺はお前が一番好きだつたのだ、今でも矢張りその通りだ。然しそれは世界中の女の中では——と云ふことだ)

と、冷然として言ひ放つ、彼の男らしい態度が好きだ。些か共鳴する點があると云てやつた。奴暫らく考へて居たが、

「それは確かに左様だわ、戀に夢中になつて、貴女は我が生命なりなんて、女の足下に蹲くやうな意氣地のない男は、妾大嫌ひよ。女は愛せらるゝことも必要だけれど、それ以上に愛すると云ふことが必要なのですわ。ですから男が餘りニチャニチャすることは、女の愛の領分を侵略するやうなものです、少しは他所々しくされる方が……、さうすると女は其の缺陷を補ふ爲に、丁度母鶏が腹の下で雛を温めるように、二人の中の戀を温めることに努める、そこに非常な満足と幸福とを感じるのよ。」

と、女が戀に對する複雑な心理を告白する、俺は笑つて、

「之を延長すれば、横ッ面の一つも殴り付けられると、更に無上の

満足と幸福を感じる譯だね。さういふことは俺の最も得意とする所なんだ。」

と云つた、こゝらまでは至極平穩無事だつたが、とん子は突然こんな事を質問した。

「貴下奥さんが無いつて眞實？」

俺は豆鐵砲をくつた鳩ぽっぽのやうな顔をした。何故ならば妻君もある。小供も一人此の頃生れた。然しごつちも敢て盗んで來た代物ではない。女房を持ち、其の結果として小供が生れる、當然のことである。此の年になつて、安下宿の二階にごろくしてゐるとしたら、その方がいくら恥辱だか知れない。だから、ヘウン、有るよ女

房も小供も」と答へるのが、俺の名譽を維持する所以である。所が不思議なる哉、それが一寸簡單に卒直には出て來ない。

「何時か以前に、そんなこと言つたぢやないか。」
てな事で撃退しやうとしたが、駄目々々。

「だけでも曖昧だから、確めて置くのよ。」

己むを得ず逆襲に決す。

「詰らない。若し僕に女房があつたら何うなんだ、而して無かつたら又何うなんだ。」

これを戦術上攻勢防禦と稱す、日本軍の最も得意とする所である。

「そんな事は別問題よ。有るんだか無いんだか、ハッキリ仰在いよ。」
遮二無二突撃して來る。形勢非なりと觀て、俺はクルリと背後を向いて、ヤケに煙草を吸つた。而して其の烟の中からでも、何か巧い妙案を掴み出さうとした。

◎湖月の宴會

抑も俺ととん子が最初に會つたのは湖月の宴會である、一見して肝膽相照し、恰も十年の知己の感があつたのである。一寸御免蒙つて、當時の経緯をちよつぴり御披露して置かねばならない、二十人ばかりの藝妓、何れを菖蒲かきつばた引きぞわづらふ其の中に、一際俺の心臓をキュツと掴んで放さない美人があつた、(素的だな)と

思ふともう堪らない、俺の眼は其の女の跡ばかり追かけて居た、すると向ふでもちよい／＼此方を見る、視線が途中でハタと衝突する、と両方慌て、側を見る、(變な眼付をするぞ、向ふも多少氣があるな)と思ふと、ゾク／＼せざるを得なかつた、然し俺は念の爲めに俺の左右を顧みた、と云ふのは若しかそれが隣りへ行く視線ぢや詰らないと考へたからである。仍で先づ右を振返つた、此方は五十の坂を踏えたテカテカ頭である。先づ大丈夫と胸撫で下して尋で左を振り返つた、これは年は未だ若さうだが熊坂長範づらだ、到底藝妓から秋波を受ける資格はない、して見ると彼の紫電一閃の的は、オホン！矢張り多々良三平にてありけるかチエ辱し、かうなると寸刻も早く

女の名を知らなければならぬ。そこへ丁度、
 『ちよいとタアさん、ポウフラが湧きますよ、一つ戴きませう。』
 と顔馴染の婆さん藝妓が來たので、オツと渡りに船だ、腹の痛まぬ酒を立つつけに五六杯飲ませて置いて、
 『時におい、彼の妓は何んと云ふのかい。彼ぢやない此方のそら禿さんの前に、今銚子を取つた、そら注いだ……。』
 『彼妓？、タアさん知らない？、嘘仰在いよ知つてますよ。』
 『ムヤ、知らない、始めてだよ。』
 『あら左様だつたか知ら、よち／＼今紹介させて取らせる程に、暫時それにて待たれよ。』

と後の半分は芝居が、りで、とん子さアーンと呼んだ、女は美しい顔を振向けた、而してキョト〜と四方を見廻したとき、婆さんは手を舉げて招いた。女はスツと立つてイソ〜と前にやつて来た。わアい火事だ〜、俺の胸の動悸は早鐘を打つた。

「はい、とんちゃん一つ、思ひざしだよ、その積りで。」
と婆さんが盃をさした。

「あら、何あに姐さん。」

と、とん子は『所以有りげの此場の状!』てな顔をして、一寸眼をみはつた。ナーニ大抵見當は附いてる癖に。

「此方がね、是非お前さんと呼んで呉れつてお頼みなんだよ。」

「あら左様。」

と云つて、改めてチラと俺の顔を見た眼の美しさ。實際その時はブルツと震へた。其後の一舉一動、悉く俺には忘れ難い思ひ出ではあるが、冗々しいから略する。要するにとん子は俺が席を起つまで、俺の前を離れなかつたのである、俺も亦、宴會などの席では第一番に切上げることを自慢にしてる俺が、その晩はレコードを破つて殆んど殿を承つたのである、何てこツちやい。

湖月を出て、土橋から電車に乗らうとおもつてぶら〜歩いてゐると、後ろからバタバタと、女の足音がした、若しやと思つて振り返るとそれがとん子であつた、可なり駈けたと見えてせい〜息氣を

はづませてゐた。そして自分の家は板新道だから、土橋まで一緒に
行かうとおもつて、車を置いて駆出して来たと言つた。人さへ居な
かつたら、俺は感激の餘りとん子の手を取てキスしたかも知れない。
別れる時に女は俺の社の電話番号を尋ねて、社へ電話をかけても
好いかと聞いた。ウム好いとも、それが俺の答であつた。

「ちよいと万年筆か鉛筆を貸して頂戴な、妾忘れっぽいから、電話
番號を書留めておきますわ。」

「忘れっぽいんぢやなくて、澤山あつて紛れ易いんだらう。」

「まア、非道いこと仰在るのね、そんな浮氣っぽいとん子さんぢや
ありませんよ。」

俺は總てのポケットに手突込んだが、鉛筆は一本も無かつた。
万年筆といふものは今日と雖も、未だに持つたことのない男である。
衣囊から手を出す序に敷島を一本摘み出して、パツと燐寸を擦つて
火を點けた。成る可く長く、責めて此の煙草の無くなるまで、女を
引付けて置く策略なんである。

「ちよいと、その燐寸を捨てないで下さい。」

とん子は然う云つて、俺の手から燐寸の燃さしを取つて、其の先
の炭のところ、懐ろ紙に電話番号を書き止めた。(オヤツ此奴、俺
よりも智恵があるぞ。) 悉皆氣に入つてしまつた。

◎答は毎に「伝」であるのである

二度目は、其の翌々日本挽町の待合、ほら農商務省の向ひに梶田家て家があるだらう、彼處で會つたんだ。その時——矢張り女が悪いのさ、若しとん子が、

「貴下、奥様がお有りなさるんでせう？」

と聞いたら、俺は何をかくさう屹度正直に、

「呔。」

と答へたんだ。ところが奴は、

「貴下奥様は無いの？」

ときくから、つい俺は、

「呔。」

と云つてしまつた。答はいつでも「呔」である。乃ち非は問ひ方にある。俺は神かけて誓ふ、指切りしても好い、女を欺いて不正な戀を樂しまふとしたのでないことを。然るに二人の關係は、其の後急速な速度を以て突進してしまつた。斯うなると流石に、少しばかりある俺の良心が承知しない。

（オイ、早く白状してしまへ、でないといふと今に飛んだ間違が起るよ。）と度々忠告した、で俺は今夜こそ愈々それを打撒けてしまはふと幾度か決心をした、すると極つてメフィストフェスの叔父さんが飛出して来て、

（それは無謀と云ふもんだ。さう宣告された時、彼の女が如何に失

望落膽するかを考へて見給へ、それを可憐想だとは思はぬかい。人間は知ることさへ無ければ幸福なのだ。それが遅ければ遅いだけ幸福なのだ。凡て人工と云ふことは良くないよ、柿の實は熟すれば獨りでに落ちるものだ、青い間に棹で叩き落とすなどは、あれは全く慈悲と思慮とを知らぬ餓飢共の所作だ。」

と反駁する、成程それも左様だと又考へ直して、俺は相變らず俺の慈善事業を繼續して來たのである。終に柿は熟れたのかしら、存外早かつたなあ。

「貴下此方をお向きなさいよ。赤ちやん可愛でせう？」

爆弾は投せられたい。俺はグルリと向直つた。

「なあーんだ、そんなによく知つてるぢやないか。」

「オホ、彼の顔つたら。それくらゐのこと、ちやアンと探偵してありますさ。」

と凱歌を揚げる。産婦の苦しむのは、嬰兒の生れる迄だ。かうなると俺は却つてグツと肩の軽さを覺えた。而して、此の結果が何うならうと、關ふものか。と決心した。(さうともく、とん子ばかりが藝妓ぢやあるまいし、よいや負るなウシ〜)と自分で自分を噓しかけて見たりもした。

「貴下、妾を瞞して居らしたのね。」

果然、敵は猛然と追撃して來た。

「……と云つては少し語弊があるが……。」

「語弊なんか無いわよ、それに違ひないぢやありませんか。」

形勢は愈々險悪である。俺が如何にメフィストフェレスの甥でも、此の難場を切抜ける詭辯は持たない、叔父さんも斯うなると人が悪い、俺は知らんよてな顔をして、横を向いてゐる。

暫らくの間沈黙がつづいた。而して今度は、とん子が身體を斜めにして、向ふをむいてツンとした。既に最後の決心をした俺には、その時、

(はーーン、色女の怒り顔で一寸乙なもんだなア。)

くらのな事を考へる餘裕が出て來た。然し尙ほ能ふべくんば、局

面を展開して此の難局を收拾せむとする未練は、無論大有りなのである。何もそりやとん子ばかりが藝妓ぢやないけれど、實際ちよつと是れ丈の藝妓は、新橋にも澤山は無いんだからね、御免なさい。

◎オ、蠮螋、汝は孫武の化身

そこに蠮螋が一疋、不圖眼にとまつた。諸君知つてるだらう、稲毛の松の林丘に蠮螋の多しことを！。俺は蠮螋の姿を見ると同時に考へた、夫れ孫子に曰はずや、凡ソ戦以テ正合ヒ、以テ奇勝。故善出レ奇者、無レ窮如ニ天地。不レ竭如ニ江海……死而更生。孫武俺を抜けんが爲め身を蠮螋に假託して出現ましせるかチエ辱しと、其の頸を摘むより早く、とん子の袂の中に投げ込んだ。すると蠮螋は、

恰も決死隊に選抜された工兵が、驟雨の如き敵の猛火を冒して、鐵線鉄を携へて鐵條網を切りに行く時のやうな勇ましい態度で、偉大なる武器を頭上に振翳しつゝ、猛然として突進して行つた。俺は急にハシヤイだ調子になつて、

「僕が悪かつた。悪かつたよ。然し君は、彼の時俺がさう答へるより外に途が無かつたと云ふ事を察して呉れるだらう。若し僕が君に惚れて居なかつたとしたら、決してそんな嘘は言はなかつたよ。それを明々地に告げれば、戀の成立を妨げやしないかと思つたからだ。僕は戀の爲なら何をするかわからん、嘘を吐く位は朝飯前だ。若し競争者が現れたら、僕は其奴を殺すかも知れない、無論

君も殺す僕も死ぬ……」

俄かに滔々懸河の辯を揮つた。とん子は確にニコリと笑つたやうだつた。然しそれは此際頗る威嚴を損ふと考へたらしく、振向きもしないで、

「ボルクマンさん、そんな殺し文句を誰に仕込まれたの。」と冷然として云つた。

俺はそつと袂の中をのぞいた。紹縮緬の繻絆の袖が鉄に引かゝつて、頗る前進難を感じてゐるらしく、惡戰苦闘の真中である。

「赤ちやんの名は何とつけたの。」
は、アン最早打方止めッかしら。

「春子と命名たよ。」

「嘘仰在いよ。」

彼は再びツンとした。春子とはとん子の本名である、同時に疑ひもなく多々良三平の長女の名でもある。私かに思ふに、初めて阿父さんとなつて、其の小供に名を付ける時くらゐ、恐らく無用の努力をすることはあるまい、朝から晩までかゝつて無量三百と幾つの女名前を書上げる、妻君の名前を除いた外は、凡そ知つてゐただけの女名前を悉く列記する、これが一仕事だ。それからそろ／＼選定に取かゝる、お松・お鍋などは女中向だから一儀に及ばず抹殺、節子は好い名だとおもふけれど、畏れ多いから御遠慮と決する、鞠子は平凡

だけれど、マリーと引張れば頗るハイカラな名になる、しかし斯んな名は決して母親の賛成を得るものでない、千江子は何うだと云へば、千江は智慧に通ずる、惻怍さうでおとなしい好い名だと母親悉く感歎して、それと極めては何うかと云つた、お前も然う思ふかい？ 實に惻怍でおとなしくつて、而もお前よりかすつと美人だつたよ、うツふ是あ俺の初戀の女の名だよ、些かくすくつたい氣がして提案者の方から撤回する、苦心慘憺の後辛じて其の中から最良のもの二つを選び出した、選擇に選擇を重ねただけあつて、何方も捨てがたい、出来ることなら二つつけて置き度い位のものだ、散々迷つた揚句、翌朝に至つて斷乎として、此の平凡な名前を採用したのである、

それは單だ春生れたからといふ理由で。

◎握手しませう、とドッコイ

然しこんな経緯を今茲で語つて聞かせたところで、とん子は何の興味をも感じないに極つてゐる。で、俺は斯う云つた。

「嘘なものか、嘘と思ふなら明日にでも區役所へ行つて、戸籍簿を一覽して來るが好い。丁度君と知り初めて一週間ほど経つと、赤ん坊が生れたんだ、そこで僕は躊躇なく君の名を取つて附けたんだ、斯うして置けば、僕は天下晴れて。大びらで、家に居ても春子々々と呼べるだらう、退屈な時は紙の端片へ、(可愛い、春子よ)てなことを書いてゐることも出来るだらう、(オ、最愛の春子よ)

ツて、頻摺りすることも出来るだらう、僕は大成張りて妻君の前で惚氣散らしてゐられるんだ、それが何んなに僕に取つて愉快だか知つてるかい。君に逢へない日は、僕はそんな他愛もない事をして、自ら慰めてゐるんだよ、アハ、、、莫迦だなア僕は。」

さう云つてとん子の顔をソツと覗いて見た。とん子は恰も毒瓦斯に襲はれた佛蘭西兵の如きものである、最早全く攻撃精神を缺いてゐるツッ

「あら然う！、握手しませう。」

とばかり、籠み上げてくる嬉しさを包み切れず、ニンガリ笑つて俺の手を取らうとした、とドッコイ、今や我が軍大に攻勢に轉すべき

時期である、握手一つで和睦して堪るものか。

「子供の名前なんか、何うだつて関係はない。問題の解決は早いよいよ、かうなると僕は性急だからな。僕には妻子のあることを改めて茲に告白する。それ故僕達の関係もこれで終局だ——と云ふんだね。」

とん子は屹として、俺が未だ一度も見ただことのない嚴然たる態度で、

「貴下は、随分水臭いのね。妾がそれを知つたのは一月半も以前の事です。別れる位なら、別れることが出来る位なら、其の時別れて居ます……。」

と云つて、一寸眉をひそめて、左の手を袖口へ突込んだ。俺は愈々一騒動持上るわいとおもつた、そしてヂツと可笑しさを噛みつぶした。

「貴下は、そんな野暮な妾と……キヤツ。」

とん子は飛び上る、螻蛄は地上に投げ出される。俺の笑ひは一時に破烈して、轉げまわつた。とん子は口惜しいやら、可笑しいやらで、半泣半笑ひと云ふ奇妙奇天烈な表情をして、

「莫迦にしているのね。妾が一生懸命腹を立て、ゝあるのに、貴下は巫山けてゐるんですもの。妾の、虫の嫌ひなこと、好く知つてる癖に。」

と白眼め付けた、オ、怖い。存じて居ればこそ。

かゝる波瀾のあつた後の其の夜の歡樂の、如何に楽しきものであつたかは、濟まないが想像に任せておく。翌日は銚子の犬吠崎へ行つて、そこで又一晩泊つて三日目の夕方に歸つた。二三日経て社の方へ小包が來た。披いて見ると「大きな春子より、小さな春子様へ」として、眼覺めるやうな友禪縮緬が、丁度赤ン坊の着物一枚分だけはいつて居た。

「餘りいゝ柄だつたから、買つて來たよ。」

宅へ歸ると斯う云つて、妻君の前へ投げ出して置いた。四五日して里の母がやつて來た、すると妻君は自慢らしく、

「小供は嫌ひだし云て居ても、矢張り阿父さんですねエ。此間社から歸りにこんな物買つて來たんですよ。柄の見立方だつて巧いでせう。」

こんなことを話してゐるのを聞いて、俺は苦笑せざるを得なかつた。

隣家の鶏

◎變妙な鶏の餌料

俺が會社から歸つて來ると、妻君の頬がブーンと海豚提燈の如うに脹れてゐる。オヤ／＼北西の風雨模様ありだな、何事や起りけん女文字の手紙でも舞込んだのかしらと、平常悪いことがしてあるから、恰も地雷火でも踏む心地。しかし斯ういふ際は特に威嚴を維持し、敵をして容易に乗ずる機會無からしむるに限ると、芝居の將門親王みたいな顔をして、反りくり返つて靴の紐を解きかゝると、

「貴下、また隣家の鶏が、萬年青の芽を皆な喰べて行つたぢやありませんかッ。」

「ませんかッ。」

と豚の子のやうに鼻を鳴らした。何あんだい鶏のことか、そんなら何も強てこんな怖い顔をしてゐるにや當らない、笑ふよそらニコリ。

「貴下は、隣家の鶏にこんな事をされても、笑つてばかり居るから、だん／＼鶏が増長するンですよッ。」

オヤ鶏つてそんなものか知ら、人間の顔色がわかるんかしら、兎に角近頃隣りの鶏の爲めに、時々家庭の平和が攪亂されるのには、俺も少々閉口してゐる。昨日は千兩の實を啄むし、一昨日はベコニアを二鉢平らげて行つた相だ。其の都度俺は、妻君から手痛い攻撃

を受けなければならぬ。察するに妻君は、俺が隣の鶏を嫉しかけて、彼の女の後生大事にしてゐる野菜畑や植木鉢を荒させるものでも考へて居るらしいのである、でなければ「ちやアありませんか」てふ詰問的語調は、此の場合使用し得られない筈である。下水口の板塀の際へ、そつと「いんげん」を植込んだ時は、無論隣の鶏は見ては居なかつたのだし、加之に土を覆せて置いたのだから、千里眼でない以上は透視できる理由はないのに、一粒残らず堀出して喰つてしまつた、彼れだつて鶏の智慧とは思はれんと云ふんだ、成る程其麼ことは鳥のやる仕草だ、塵芥箱を引くら返して、蟹の皮を引ずり出すなんかも、彼奴の仲間に限ることである、鶏なんてものは、も

つと應揚で紳士的である筈だ。然るに隣の鶏の意地の汚ないつたらぬ。その點に就いては俺も呆れてゐる事がある、と云ふのは斯うなんだ、或る時書齋で煎豆をポツリポツリ嚙りながら、小説を讀んでゐたと思ひ給へ、すると奴さん（鶏のことだよ）五六羽で窓の下へ押かけて来て、クツクツクツと小八釜しく騒ぎ立てる、（少し此方等にも分配し給へな）と言てるらしいのである、仍で俺は二粒三粒ポツと投げてやると、今まで平和であつた奴等の集團に、突如として異常な活劇が起つて、女だてらに（斯ういふ場合、牡鶏は決して競争に加はらない、泰然として、牝鶏共の淺ましい鬭争を打眺めて居る態度は、どうしても古武士の倅がある。）見榮も外聞も關はず、多

寡が一粒の豆を奪ひ合つて大喧嘩をやる態は、まるで人間の立食の宴會をつくりてである。フンこいつは面白いといふので、ボン／＼投げてやつて居ると、妻君から、

『お止しなさいよ、勿體ないぢやありませんか、其塵泥棒鶏なんか、水でもぶつ浴けておやんなさいな。』

と抗議を申込まれた。然らば何ぞ外に無いかしらと見廻すと、火鉢の中に小さな消炭が有つた。是れなら確かに勿體なくないと考へたので、それを摘んでボンと投げると、五羽の牝鶏の中で一番敏捷な奴が、拾ひ取るより早くグツと飲み下した。尤もそれが咽喉の途中まで行つたとき、眼玉をクル／＼と廻轉させて、一寸躊躇したらし

かつたが、此際中止することは他の牝鶏共の手前、體面にかゝはるとでも考へたか、強情にもグツと嚥下てしまつた。

次に俺は、ふツとパイプから煙草の吹殻を吹出してやつた。例に依つて混戦亂闘のあつた揚句に、目出度く或る一羽の嘴中に歸したが、今度は見榮も外聞もなく、ケツケツケツと野田遞信大臣の如うな聲を出して（尤も遞信大臣のケツケツケツは笑ひ聲だが、鶏は笑つたのぢやない）吐出してしまつた。俺の妻君が隣の鶏を見て、嬉し相な顔をしたのは此の時ばかりである。

妻君は斯んな風に云ふ、

「隣の家では、鶏に餌を與らないんですよ屹度、だから意地が汚な

いんですよ、でなきや何もわざく他家の庭まで漁つて歩きはしませんわ。』

然し俺の観察する所に依れば、然うてはない、全然餌を遣らぬ譯ではない、唯だ給與の分量が足りないといふに過ぎない、生存に必要だけの餌料を與へられぬ場合、彼等は自ら働いて喰ふの外はない、「資本に國境無し」てふ語が人間世界に行はれる如く、鶏の世界には「餌料に垣根無し」てふ國際聯盟協約みたやうなものがあるに相違ない。だから隣の鶏が、其の生活資料を漁る爲に、垣根を踰えて此方の庭内に侵入して來たからつて、鶏を憎む理由はない、鶏の生存その物を是認する以上はだ。従つて其の侵入を妨げる爲に、生垣の代

りに鐵條網を以てするが如きは、頗る恥づ可き卑劣な行爲である——と俺はウイilson以上いじやうに公明正大な論理を以て、鶏の庭内侵入を辯護するんだけれども、妻君には又妻君相當の反對意見があつて、「何處の國の養鶏書に、千兩の實や萬年青の芽を、鶏の餌料として擧げてありますか。貴下あなたの大好きなウイilsonだつて、移民問題に就ては人種的無差別説を否認して居るつて云ふてはありませんか」

と、強か俺の論理の弱點を衝いた積りか何かで、之を要するに隣家へ行つて、今後鶏の垣根を越さないやうに談判して來るか、で無ければ、家主へ出かけて垣根の大修繕を交渉して來いと云ふにある。

馬鹿め、俺が妻君なぞに凹まされて、其麼べら棒なお使ひに行くお人好しだと心得て居るのかヤイ。

◎名著『鶏を飼うて五十年』

考へても見るがよい。之を反對に、俺の家で鶏を飼つて居て、隣家の亭主から右様の抗議的交渉を受けたとする、俺は斯う云つて難なく撃退してしまふ。

『鶏は垣根を蹴破つて、貴下の庭内へ侵入する譯ではない、只だ破れ目から潜入するばかりだ。鶏は俺の家の飼ひ者に相違ないけれど、俺は彼の自由を束縛する権利は持つて居ない。これが小犬だつたら、俺は直に鎖で繋いでしまふから、非常に都合がいゝんだ』

が、鶏の頸を縄でしばつて柱に結はへることは、日本の習慣が許しませんから、悪しからず。』

何と、グウの音も出ないだらう。俺が談判に行けば、向ふで此の通り言ふに相違ない。否、もつと種んな理屈を並べ立て、俺を遣り込めるかも知れない。これはお前には内緒だけれど、全體向ふの鶏屋の亭主の方が、俺よりも智慧が有り相なんだ。相なんだとは遠慮しての言葉で、實際隣家の亭主は偉い奴だと、内心大に敬服して居る次第である。隣の鶏屋は只の鶏屋ではないぞ、舊は文士様である、歌を作つたり小説を作つたりする類の人間様である。それが偶然の動機から、養鶏の本を書いて出版したんだ相だ、今まで血を

吐くやうな思ひをして、歌や小説を作つても、曾て一千部と賣れた例の無かつたのが、何うだい其の養鶏の本は忽ちにして五千部賣切れになつたぢやないか。表題は『鶏を飼うて五十年』といふんだが、其れを書く——否録で切て糊で貼り合せるのに、七日とは費らなかつた相だ。無論本書の購讀者は、著者が此世に生れ出る十五年も以前から養鶏業に従事して居た事實を知らう筈はないからぬ。

これに味を占めて、次に『鶉の飼ひ方秘訣』を出し、『養蜂の手引』を書き、『藥草栽培法』を出版して、古人我を欺かず、詩を作るより田を作れたなアと、茲に豁然大悟して、竿頭更に一步を進めて今度は鶏を實地に飼うて見る氣になつた。自著養鶏秘訣を師として、恐

る恐る實行て見ると、ナニ存外容易いものだ、糶と菜ツ葉屑と水とを與へて置けば、鶏は自然にズン／＼成長して、時期到れば石も産まずに矢張り鶏卵を産んだ。

『養鶏業なんて譯ないですよ、始めてから未だ漸う半年ですけれど、此頃では私の妻だつても、レダフォンとブリモスロツクを立派に鑑別るやうになりました。何うです御宅でも、慰み半分五六羽飼つて御覽なさい。又おわかりにならん點は、御近所の事ゆるちよいく／＼來て御教授しますよ、ハ、ハ、ハ。』

と云つて、先日遊びに來た時、名著『鶏を飼うて五十年』を一部置いて行つた。莫迦にしやがツて、俺を東京もんだと思つてる。憚り

さまながら養鶏業にかけては、著書こそ無ければ俺の方が大先生様だ、僅か三年の間に五百羽も斃して、千圓から損をしてゐる腕前だ、それ位に鶏では苦勞してゐるんだ、唯だ俺の知らないこと、云ふのは、隣の先生のやうに鶏を彼のやうに繊細く育てる秘訣だけだ。

「一體何うすれば、斯うも揃ひもそろつて、干物みたやうな鶏ばかり出来るのか知ら。」

と私かに感歎してゐる次第なんである。

又、隣の先生はこんな事をも自慢らしく言つて居た。

「實際鶏は偉いですよ。養鶏の収入の主眼は卵ですがね、此頃では卵が好く賣れるので、月々それだけで三十圓の純益があります

よ。謂は私達が鶏を養つて居るのでなく、鶏に私達が養はれてゐるのですな。アハ、ハ、ハ。」

親が子供の惻愴を吹聴する爲には、自己の馬鹿サ加減を甘んじて暴露することくに、男一疋の腕が五羽の牝鶏に如かないことを、恰も光榮と考へて居る如くである。何て意氣地の無いことだッ、——とは言ふが、俺だッて熟考へて見れば、牝鶏五羽に較べて、何程も偉くないんだもの、チエツ、チエツ。

然し俺の妻君は、隣の先生が歸つた後で、

「五羽の牝鶏が、月に三十圓の卵を産むッて云ふのは天下の奇蹟ぢやありませんか。」

と言つた。成る程さう云へば少しく怪しい氣もする、そこで二人で算術を始めたんだ。假に一羽の鶏が毎日一顆の卵を産むとする（事實に於て、有り得べからざる事だけれど）、五羽で五顆だ、一顆の鶏卵の價十錢也としても、一日の五十錢、一ヶ月拾五圓である。今少しく實際らしく計算すれば、一羽の産卵數一年百五十顆、一顆七錢として一ヶ月四圓四十錢にしきやならない、此の内から餌料（餌は隣家のいんげん豆、萬年青の芽等を以て、其の幾分を節約し得るとしても）其他の經費を控除すれば、純益は二圓か二圓五十錢位のものである。俺は先づ胸を撫て下した、何故ッて、俺は五十羽の牝鶏よりかも偉いんだもの。

◎地玉子製造法

然し、隣の先生の言ふ所は、決して法螺でも無ければ、奇蹟でも無いらしい。門標と並べて『地玉子分譲します』の札を掲げ、裏庭に五六羽の鶏を飼つて、一家の生活費の大部分を、其の收入に仰いで居ることそれは事實である。先生の言ふ所も事實であり、俺達の算術にも間違ひはないとすれば、ハテナ、俺は頭を地球と同じく二十一度半に傾げて、俺の大嫌ひな物理の試験の時だつて、こんなに苦しんだことは無いと思はれるほど左様に、一生懸命に、一晩まじりとも爲ないで考へた結果、ハ、アン、ぼん（膝を叩く音。）何故ならば、地玉子は上海玉子に比して一顆に就いて二錢乃至三錢方高

價である、だからである。それから？……、それでおしまひだよ、それ位の理屈と算盤とがわからぬやうでは、氣の毒だが諸君も生涯貧乏物語の主人公たい。

得手生物識の先生は——實は俺も御多分に漏れぬ一人だつたのだが、近所に四軒も五軒も乾物屋のあるのに、女中を十町も先の町外れの「地玉子分譲」まで走らせて、

「上海玉子なぞ、喰へるものか。玉子は地玉子に限るんだ。」
てな事を仰在る。そこで、

「左様かなア。一體輸入玉子と地玉子とは、何して鑑別するんだい」と質問する、先生ハタと當惑する、蛙が煙草を喫んだ時そつくりの

顔をする。然し決して、「それあ君、判つてるぢやないか、輸入玉子は綺麗に洗つてあるし、地玉子には鶏の糞がコピリ付てるもの」と、明快卒直には答へないよ。見識にかゝはるからね。必ずや、
「食つて見れば判るサ。」

と仰在るに定つてゐる。其の實、何も解るんぢやない。鑑別の秘訣と言へば、第一に卵殻に附着せる鶏糞である、第二は其家に鶏を飼つて居ると云ふ事實である。夫れ等「地玉子あり」の家には、最も人目に着き易い場所、譬へば門内若しくは軒下の何れかに、五六羽の鶏が籠で伏せて在るものだ。斯くてある以上、夜中密かに問屋から上海卵子を貫夕で仕入れて来て、鶏舎の中をころ／＼ローリング

して、いこたま鶏糞を塗付けて置けば、一點疑ひを挟むべき餘地は無い。これが地玉子製法の秘訣である。

『そ、そ、そんな事をしちあ詐欺ぢやないか。』

と云ふのか、或ひは然らんだ。然しそれが詐欺的行爲であるとするれば、何うだと云ふのか。その不正事件を検擧すべき職掌を有する檢察官だつて、上海卵子と地玉子とを鑑別するには、矢張りそれ鶏糞の有無に據るの外は無いいぢやないか。

安全第一の詐欺である、検擧を受くるの恐れなき詐欺である。

話が分岐路へ外れたね、すつと引戻すよ。そこで乃ち斯るが故に、俺は隣りの先生の處へ、鶏の庭内侵入差留の件に就いて、特派

されることを御辨退したいんである。

◎家主と云ふ類の人間

然らば第二案たる家主へ垣根修繕方交渉の件だが、是れ亦餘りぞつとしない。全體俺は家主といふ類の人種を虫が好かない、此の點は敢て冗々と説明するまでもなく、大方の諸君子定めて御同感であらふと思ふ。

御同感であらふと思ふ。俺が此家に引越して間も無い頃だ、茶の間の畳と玄關の畳が穢れてゐるから、取替えて呉れと交渉に行つたんだ。すると奴さん『面白くもない』てな顔をして、翌日やつて來て『これなら未だ綺麗だ、半年は大丈夫だ』と吐すぢやないか、俺は此

の疊を以て美なりと稱する、奴の審美眼の低級なのに呆れ返つてしまつた。それから去年の暮だ、雨が漏るから屋根を修繕したら何うだと忠告に行くと、奴さん夫には答へないで、「家賃が二つ停滞したが、ごうして呉れる」と、顧みて他を言ふではないか、奴の論理に従へば、家賃停滞すれば雨漏る、即ち停滞は原因で雨漏りを其の結果と做す如くに思はれる、これが店子の論理とは全然反対だから不思議だ、雨漏る、故に家賃は停滞せざるを得ぬ。これが借家人側の論理である。況んや俺は單に家を借りてゐるのみで、家は依然として家主の所有物である、雨が漏るのは家屋の一部が破損したからである、破損は家屋の價値を減損する、破損大なれば大なるに従つて

價値の減損亦大である。故に俺が其の借家の保存に就いて民法上所謂最善の注意を拂つて、破損未だ大ならざるに先つて修繕を忠告してやるのは、取も直さず禿君の財産を保護してやる所以である、然るに奴は、宛ら詐欺にでもかゝつた如な面をする、言語道斷である。いゝよ、火事があつても雨戸一枚取出しては遣らないから。家賃の催促などは、月に二三度家主の方からやつて来るだけで澤山である、夫れとても實は多過ぎる位だ。何も此方から態々それを承りに罷りつん出る必要は毛頭ない。奴の變妙論理學から行けば、「家賃停滞すれば垣根も亦破る」といふ論結に到着するに極まつてるんだから、馬鹿々々しいツちやない。

◎お釋迦様でも御存知なかる

右の理由に依つて、妻君の提案を二案とも否決すると、海豚提燈の如な頬を、一層ぶツと膨らませて彼の女の唯一の娛樂たる園藝の趣味が鶏の爲に蹂躪せられることを悲しみ、貴下は妾に對して些少も同情を持たない、薄情である、内擴がりの外つぼみであると、知てるだけの悪口を吐き散らして、妾は明日から貴下の留守の間、茶の間に寝そべつて、蜜豆を嘗めながら小説を讀んでるからいゝ、でなきや猫を一疋飼ひますから、てな不貞腐れを言ふんだ。何方も俺の大嫌ひな事である。そこで俺は、

「一寸耳を貸し給へ。」

と云つて、其の昔曾呂利新左衛門が太閤秀吉の耳だれを嗅いだ時の真似をすると、妻君ニツコリと笑つて、

「甘く行くでせうか。面白いわネ。」

と天候忽ち恢復、碧空一片の雲翳を止めずさ。

「ぢやあ御馳走しますわ。」

戸棚の扉がスーと開いて、鮪の刺身が現れる。コレだ諸君、一週間位澤庵と茶漬で奮闘する大覺悟がなくて、夫婦喧嘩をするのは止し給へ。

翌日の日曜を幸ひ、俺は半日が、りで鶏の産卵箱を拵へた。ピールの空箱の中に、藁を好く打てフツクラと敷いて、見るからに座心

地の好ささうなベッドを造り、上を蓆で覆うて薄暗くし、箱の附近には砂を撒いて砂浴場をさへ設けたんだ。而して爾後といふもの、從來とは打つて變つて隣の鶏ごもを款待した。妻君は毎日焼芋の皮を御馳走するし、時には白米を掴み出して振舞ふこともある。煙草の吸殻の外は何でも提供するに躊躇しなかつた。親切なる哉、彼等の爲に水壺さへ備付けられた。唯だ必ずや、それらの提供は件の箱の附近に於て行はれたのである。

次の土曜日の夕方、俺が玄關の閤を跨ぐと、妻君いそぐと出て来て、聲を低めて、

「貴下、産みましたよ、ほら。」

と云つて、大きな卵を一顆出して見せた。其の晩俺と妻君とは、今後の卵の使ひ途に就いて熱心に協議した。先づ隔日にオムレッツを造ること、其の間の日には生で一顆宛飲むこと、カステラの原料として常に五顆位は貯蓄して置くこと、それからA君の處へも取敢ず十顆ばかり病氣見舞として贈ること、味噌汁の中へ落すのも、時には悪くないな事を話し合つて、もう衆皆卵大盡になつた氣で喜んだ。無論鶏の奴は、逆も俺の要求を満足させるだけの數は産まないけれど、兎も角も日々一二顆づゝは絶えず産んでゆく。而も真正正銘疑びなき地玉子をである。會社から歸ると、玄關で靴を脱ぎながら、忍び聲で、

「今日は幾顆産んだえ——」

「ふたーつ。」

或る日垣根越に隣の夫婦が語るらく。

「如何したンでせう。近頃滅切り卵を産まなくなりましたねエ。」

「左様だなア、未だ老衰れる年齢ぢや無いんだが……。食物でもわるいかなア……。」

エへ、お釈迦様でも御存知無かる。コレ鶏共、糞だけは向ふでしてやれよ。

金 策

◎タツタ五百圓で好いんだが

我々五六人で、協同經營の下に一大雜誌を創刊しようといふ相談は、直にまとまつた。而して最初資本として、五千圓ばかり計上したが、保証金に千圓も寝かすのは如何にも馬鹿々々しい、それに東京には保証金用の公債證券を貸すことを商賣にして生活してゐる者が澤山に在る、奴等は可愛想に親譲りの財産をシコタマ背負ひ込んで、そんな事でもするより外に何の働きもない低能な人間だ、既に斯かる營業が社會から認められて居る以上、それを借りて遣らぬと

いふ事は不徳義だ——と云ふHの議論は、多数の同情を得て、先づ八百餘圓(四分利公債額面一)は削除せられた。次にIは、

『廣告料五百圓て是あ何だい。多寡々々二千部ぢやないか、文藝消息欄に五六行も吹聴しておけば、忽ち賣切れは極つてゐる。莫迦だなあ君等は、賣るべき雑誌が有りもしないに、見得に廣告を出さうと云ふのかい。』

と一喝した。EはFでまた、

『一體こんな莫迦氣た費目を提議したのは誰だい。』
と罵倒した、もと／＼初めからこんな愚劣な費目の設定を主張した者は一人も無かつた筈で、怪しからん奴だ、廣告料奴勝手にソツと

忍び込んだに相違ない。依つて一同更に油断なく、嚴密に審査した結果、たゞの五百圓さへあれば、立派に初號を發行し得らるべき確信に到達した、若し夫れ初號一度び出でんか、旭日冲天の勢ひを以て逐號發展し行くべきことは、毫も疑ふの餘地はない。併し俺は——思慮の周密なる點に於て、到底奴等と比較にならない俺は、是非も三百圓くらゐを準備して置く必要を主張し、其の理由として次の如く述べた。

『初版は即日賣切となる、注文は尙ほ頻りに殺到する、直に再版を行らなければなるまい、其の費用としてだ。』

此點は全く閑却されて居たので、實際グツと參つたらしいんだが、

剛情なTは、

「それを俺が氣付かぬと思ふのか。俺は商略上断じて再版をやらぬ方針を採り度いんだ、すると讀者の方では、第二號から買外しちや大變と思ふから、發行日前から本屋へ駈付ける、氣の利いた奴はドン／＼前金で拂込んで来る。自慢らしく再版廣告なぞする奴の氣が知れん」

と反駁し、とう／＼多數決で、俺の提案は否決となつた。

五千圓が其の一割になつたんだから、誰も彼もすつと肩の重味が下りて、負擔の輕減を喜び、勇氣と前途の希望とは更に百倍した。とは言ふものゝ金は未だ一文も、其處に有るんぢやない。頭割にす

ると各自に百圓づゝ、持寄らねばならぬ勘定である。

「困つたなア、二三日前だと、百圓くらゐ何うにかなつたんだが。」と先づHが、さも／＼残念さうに嘆聲を發した。此の男は常に懷中に二十金三十金を所持せぬことはない、蓋し男子一度び鬪を跨げば七人の敵ありと思へ、何時何處で如何なる恥を掻かないとも限らぬ、それ故これ位の金は準備してゐなければならぬと云ふのが其の理由で、今頃の若い者としては實に稀有の心掛である。只それがHのは何時だつて二三日前なのだから不思議だ、だから誰も此の問題が、二三日前に議せられなかつた事を悔む者は一人もなかつた。

Kはまた反對に、

「此の計畫が、今少し後だと大變都合が好い、然らすれば五百圓くらゐ俺一人で負擔して可いんだがなあ。」

と云つた。と云ふ理由はKに一人の伯母さんがある、その伯母さんが二千圓の生命保險についてゐて、保險金の受取人としてKが指定されて居るといふのである、是は事實であるらしく思はれた。我々はKが仲間の一人に加はつて居たことを賀せずには居られなかつた。そこでFはおづくした態度、如何にも氣の毒だなあてな思ひ入で、「左様かい、一時さうして置いて貰ふと都合がいゝなあ。ナ―ニ半月や一月、計畫の實施を延期しても關はんさ、ねえ諸君！」と總代面をして一同を見廻す、無論(異議あり)なんて叫ぶ者はない。

「而して、其の伯母さんてのは、一體何の病氣なんだい？」と聞くと、Kは愕いた風で、

「病氣？、冗談云ふな、俺の伯母は小供の折からついぞ薬と名のつくものを服用だ事のないのが自慢なんだ。」

Fはブリ／＼怒つて、Kを詐欺だと罵つた、のみならずそんな伯母さんなんかスペイン感冒にでも取つかれるがいゝと悪口を吐いたので、Kも黙つては居られない、果は掴み合はふとするのを、まあまあ／＼と兩方を押なだめて、更に眞面目、慎重なる態度を以て、金策に就いて協議を凝らすことにした。

◎特別方略と其役割

結局借款に依るの外策なし、と云ふに一決し、我々は進んで借款方略の討議に移つたが、唯だ一人のHを除いては、斯ういふ事にかけては空ツキシ経験の無い連中の寄合だもんで、努力の割合に効果が無ければならない。それ故Kは素的に大きな欠伸を一つやつて、「金を借りる事は、新體詩を作るよりも餘ッぽど六ヶ敷い。」と長嘆息した。その點に行くと、實際Hは斬然頭角を抜いて居た。「僕に一任し給へ。而して僕の指圖通りに働さ給へ。諸君が左様さへするなら、五百圓位借入れること、ナニ譯はないさ。」

と、如何にも力強く頼母しく見えた。是が外の事であつたら、苟くも他人に物事を一任するなんて、假令それが如何に微細な事にもせ

よ、決して肯じ得るTFKではないんだが、何といつてもHは過去に於て、二回迄も高利貸から差押を受けたといふ尊い経験(妙くも此際に在りては)を持つてゐる爲め、兎に角斯道に於ける先輩として、一同異議なく彼の指揮を受けることを宣誓した。奴頗ぶる得意なもので、先づ一般方略に就いて演説し、次いで一同に夫れく特別方略を授けた。俺は實のところ多少経験が無いでもないんだけれど、餘り名譽ともならぬ事件に出しやばつて、一日の長を振廻すには當らないと思つて、借金で一體どんなことをするものかてな顔をして、黙々と謹聴してゐた。

Hの謂ゆる「特別方畧」に基く役割といふのは、斯うである。

借用人

當時賣出の新進作家

K

保證人

豪農の舎弟、無職

多々良三平

多々良家書生

T

物品蒐集係(兼來客)

F

H自身は參謀長氣取りで、懐ろ手でブラ／＼しながら、(あゝ仕給へ、かう仕給へ。左様ぢや無いつたら斯うだよ、ごちだなア君はッ。)位の熱を吹いて、K以下を願でしやくつて、それで一人前の義務を果たさうつて云ふ了見なのである。而して其の方略と云ふのは、當時賣出しの新進作家であるKが(オイ笑つちやいけない)、獨力で雑誌の發行を企劃した、勿論其れは頗る有望な事業で、都下の出版屋

は逸早く聞きつけて、其の出資者たらんことを懇請して來るのだが、彼等に其の利益を壟斷されることは太だ残念だ、だに依つて飽く迄自ら經營せんと欲するのだが、恨むらくは五百圓程資金が足りない(五百圓足りないのだよ、それが資金の全部だなんて誤解して呉れては困る)、かう云ふ具合にして都下の然る高利貸に對して借款を申込み、すると先方は、(相當の保證人が有るなら)と御出なさるに極つてゐる、そこでKは、(有り、大に有矣)てな事で、其の高利先生を俺の家まで同道して來る。こゝまでがKの役目で、後の料理は偏に保證人たる多々良三平氏の偉大なる手腕に俟つものである、と云ふ次第だ。

Hの説に従へば、高利貸と云ふ者は決して借用人自身に金を貸すものではない、何となれば何うせ血の出るやうな高利を承知で借りる奴に、ろくな人間の有るべき道理がない、其の口實が如何に適當にして、又修辭學の妙諦を悉して居るにしてもだ、そんなことには載せられない、そこで勢ひ保證人の地位・名望乃至財産に由つて、首の振り方は決せられる——と云ふんだ。取も直さず俺がシテKがワキ、T・Fに至つては『其他大勢』といふ所である、我Hと交はること茲に年あり、彼の非凡なる材幹を認めたのは今日が始めてである、俺が大臣になつたら、奴を秘書官に使つてやつても好いと思つた。此の保證人と云ふ大役、此の俺を差措いて他に求め難いと看破し

た活眼、大いに嘉すべきである。

試みに見よ、彼の毅然たる花崗石の門柱を！、梶の一枚板の門扉を！、瀬戸の表札の品の好さを！、堂々たる西洋造りの玄關を！、若し夫れ扉を押開いて中に入れば、其の取付にある姿見附の素破らしい外套掛を！、オホン三十五圓もしたんだせ。應接間だつて西洋式だ。而も憚り様ながら、書齋兼用にして屑籠から原稿紙の破れた奴が喰み出して、インキの瓶が逆立をやつて居ようと云ふそんなシミツタレたんぢやない。更に奥に進んでは……、イヤ是より奥入るべからず、今日は少し取散らしてあるから。但しTだけは此役割に就て、絶對的に不服であつた。それは如何に努力しても、逆もTに

は書生の役が勉強まり相に思へぬと云ふのだ（俺達は又Tが一番適任と思ふんだが）、而して其の理由として、曾て新橋の或る藝妓から、金持の道楽息子と勘違へられて、指輪なんかねだられて困つた話をして聽かせた。それにまた一度の如きは、三四年前のことだが大阪見物に行つた時、旅館で子爵の若様と間違へられて、下にも置かずチャホヤされた爲に、結局莫大な茶代を奮發しなければならぬ始末となり、大に馬鹿を見た一件を想起した相で、それも附加へて且の再考を促した。然し誰もTにこんな奇蹟的事件の存在を信する者はなく、皆鱈のやうな大口を開けて笑ふばかりだつた。

Tは愈々ムキになつて、

「且、貴様はするいぢやないか、貴様も何か一役やれ。自分だけは高見で見物て法があるもんか。」
と喰つてかゝつた、且は手を振つて、

「それが駄目なんだ、俺は對手の高利貸を知つてゐるんだから。」
「知つてるなら尙更だ、都合好いぢやないか、知らぬ者同士よりかも……。」

と飽くまで獅嚙みついてゆく。Kが見兼ねて、Tの背中を一つ壓てほどドヤシつけた。

「何て血の環りが悪いんだい貴様は。だから矢張り立關番が適役だよッ。」

散會に際してHは、嚴然たること恰も東郷大將のやうな態度で、一同を激勵して曰く、

「我徒ノ興廢此一舉ニアリ、各員奮勵努力セヨ。」

◎高井利之助氏を迎ふ

翌日から物品蒐集係たるFに依つて、種々の貴重品が俺ん所の應接間に運び込まれた。先づ椿山の椿の軸と淺井忠畫伯の水彩畫の額、これを兩側の壁間に掲げる。素的だなア。それから無名畫伯筆某老人の油繪の肖像、何處の何者の肖像であるかも知らず、出來榮も良くないが、これを斯うして掲げておけば、誰だつて俺の親父の肖像だと思ふに極まつてゐる。破けた椅子は書齋の方へ退去を命じて、

黒塗に絹純子張りで腰を下すとフワリとお尻が五寸程も沈むやうな眩つき椅子の素晴らしいやつを四脚はご、エンヤラヤツと擔ぎ込む、これは古道具屋から一脚に付一日五十錢の損料で借入れたんだ。斯うなると敷物の花莫座はケチ臭いと云ふので、三疊敷からは喰み出し相な大熊の皮を、真中に敷いた、これとスリツバとはHの妻君の伯父さん所から借入れたんだ相で、松の盆栽にペコニアの鉢まで、抜目なく揃つた處は、縦から見ても横から見ても、オホン月五百圓以下の生活をしてゐる人の應接間ぢやアない。凡ての飾付を了へた處で、俺は柔かい椅子の上にヤンワリ腰を下して、悠然と煙草を一本（朝日では少し氣が利かないけれど）吹かして見る。身内がゾク

ゾクして、變に口元がニタリとする。たゞ何となく他所の家に居るやうな氣のする丈が不都合だけれど、俺の家に相違はない。

(こんな時にこそ、誰かお客が来て呉れ、ばい、んだに。)

と俺は思つた、妻君の従姉なぞ、來始めると二日にあげずチヨクチヨクやつて來る癖に、來ないとすると二月も三月も姿を見せない、ア、云ふ氣紛れな女は誠にいけない。俺の兄嫁と來たら一層意地が悪い、夫婦喧嘩をやつてゐるか、でなきや鹽鮭を焼いてゐる時と云ふと屹度やつてくる、これ以外の場合には決して來たことがない。俺も妻君も牛肉が好きだから、年中牛肉ばかり喰つてる、鹽鮭なんぞは口直しに、眞の一月に一度位喰ふだけなんだが、其の日をちやん

と心得て居て、かゝさずやつて來るから妙だ、而して其の言ひ草が癢だ、

(此處の家ぢやまあ、鹽鮭が好きなんですなエ。)

チエ。屹度前生は犬の性だつたに相違ない、今夜は久し振りに鹽鮭を焼いて、一ツ兄嫁を呼び寄せてやるかな。

閑話は休憩、彌々當日と相成る。Kから午前十時頃に行くと云ふ豫報があつたので、身仕度よろしくあつて、——張羅の背廣を一着に及び、金鑽のゴリくした奴を短衣に絡ませ、九時五十六分葉巻に火を點じて紫色の瑞雲を室内に遙曳せしめつゝ、敵や遅しと待受けた。俺の向うの椅子にはFが羽織袴で腰かけて居る、奴何處で工

面したか、黒の五ツ紋に仙臺平なぞ着用ちやくように及んで居る。馬子にも衣裳しやうてよく言つたものだ。斯くして控えた處は高等下宿かうとうげしゆくに轉がつてゐる貧乏文士先生びんぱふぶんしせんせいとは、お釋迦様しやくさまでも氣が付くめエ。其の紳士様しんしさまが、

「葉巻はまきつて、ドンな味あじだい一寸吸ちよつとすはせろ。」

なんて意地いぢの汚きたないことを仰おつしや在るより早く、俺おれの手てから葉巻はまきを奪うばひ取つて、スバスバやり乍ながら、

「へん、妙めづなもんだナ。何どうだい斯かうして居る處ところを一ツ寫眞しゃしんに撮とり度たいね。君きみ、その金時計きんとけいは眞物ほんものかい？」

「無論むろんさ。鎖くさりぐるみ十一圓五十錢じゆんせんせいの純金製じゆんきんせい、それも借物かりものだがね。俺おれがこいつを下さげて電車でんしゃに乗のれば、鍍金くつきに見えるんだけど、此この椅い

子すに構かまえて居みる時ときは、誰めだれだつて鍍金くつきのめめの字じも考かんがへはしないから妙めづだ。」

「だけど主人公しゆじんこうが洋服やうふくを着用ちやくようなんぞ、少々せうくバツバツが悪いね。君きみと僕ぼくと着物きものを取替とりかえた方はうがいゝね、僕ぼくは來客らいきやくなんだからな……。」

「へん、其處そこに抜目ぬけめがあるものか、一寸耳ちよつとみみを貸かし給たまへ。」

處ところへヂヤント。火事くわじぢやないよ玄關げんくわんの鐘かねなんだ。

「そら來た。おいF君エフくん、早く葉巻はまきを返かへせよ、おい返かへせつたら。」

と俺おれがヤキモキするのを、Fの奴落やつおちつき拂はらつて、

「葉巻はまきなんぞ、何方どつちで喫のんで居かたつていゝぢやないか。」

とブカ。漸やうやく引ひたくつて、自分じぶんの席せきに半分腰はんぶんこしを下おろした處ところへ、玄關げんくわん

番のTを先頭に、もうドカ／＼と入つて來た。イヤ危なかつた。

『多々良君。此の方が昨日お話しした高井……利之助さんだよ。』

『エ、私が高井です。』僕が多々良で……、さあ何卒御掛け下さる。』

式の通り初対面が済むと、俺はクルリとFの方を向いて、

『は、あ、左様な譯ですか、成る程、うん。』

てな調子で、以前からの談話を續けるやうな態度をしながら、葉巻
 なんざ如何にも喫み馴れてると云ふ風に、口にくはへッ限りにして
 プカーリプカーリ、煙を精々高井君の方へ吹つけるべく努めた。高
 利先生は早速デロリ／＼と、掛軸から額、熊の皮、乃至は活花、俺
 の金時計までも、見廻して、内々で値ぶみを始めたらしかった。F

は卓子の上の菓子鉢から、上等のビスケットを一つ摘んでポリ／＼
 やり乍ら、神妙らしく、

『と、云ふ様な次第で、全く御令兄の一言で、謂はゞ其の、會社の
 運命は決するんだから、是非とも茲は一ツ……』

で又一ツ、ビスケットを頬張つた。左様喰ふなツたら、それは半
 斤六十錢もするんだぜ。

『御令兄の態度は、即ち君の意志に由て決する……』と云ては語弊が
 あるかも知れぬが、事實は矢張りそれに相違ないんだから……。ポ
 リ／＼。』

Fは斯麼要領を得たやうな、得ないやうな事を五分間もしやべる間

に、さんぐくピスケットを喰つて、

「御出かけの所を御邪魔致して、済みませんでした。」
 を捨臺辭に退場に及ぶ。何うだい俺が洋服を着て居るのが一寸も可笑しくはあるまい。

◎是からが一騎打

これからが俺と高利先生との一騎討の真劍勝負だが、俺は先づ斯う云つて、彼の胸中に蟠まつてゐる筈の、重大なる一の疑團を形付けてやつた。

「僅かの金額だから、僕自身で用立てゝやつてもいゝのですかね、僕は憲法として、友人同志斷じて金の貸借を爲ぬことに極めて居

るのです。西洋の諺に、金を貸せば金と友人と共に失ふといふことを言つてゐるが、全く其の通りですからね。金は一寸も惜しくないが、友人は實に大切ですからね。」

高利先生は心から、俺の高尙な友情に感歎せるものゝ如く、

「御尤です……」

と、而も力を籠めて領首いた。第一壘既に陥ると見て、俺は息氣をも吐かず更に第二壘に突撃せんとする時、

「ガタン」

と扉が開いて、妻君が珈琲を持って出現しました、俺は少からず狼狽した、こんな事は全くプログラムのの中に入つて居ないんだもの。

無論此の一件なんざ奴に極内なんだから。(且は參謀長面で書齋に控えて居ながら、何てドチな真似をするんだなあ、真個にツ。)

けれども俺は、忽ち一計を案出して、

「愚妻です。此方はね高井さんて云て、K君の伯父さんなんだ。此度遣らうと云ふ事業に就て、種々その御助力下さるんでね。……事業ツてその山の方のさ。」

とやつた。高利先生もKも不意討を喰ツて、眼をバチクリ。妻君の方はKの伯父さんと聞いて、譯はわからぬ乍ら、馴々しく、

「あら、左様で居らツしやいますか。Kさんは随分お人が悪いんですね、今迄ついで伯父さんのお話なんかなさらないんですもの。」

と御腰を下しさうにする、おツとドッコイ其處に落付かれちや事破綻である、突嗟の間に用件をこしらへて、漸くに撃退し終るまで、此の間一寸お腹がでんぐり返り、後はグツとふんぞり返つて豪傑笑といふ奴、

「あは、は、は、高井さん失禮しました。實は借金の保證なぞは妻には内緒なんですからね、二三年前に、矢張り友人から頼まれて、手形の裏書をやつた處結局此方へ請求が来て、そつくり支拂はせられた事があつたんでね、爾來愚妻は手形の裏書又は保證と聞くと、毛蟲の如うに嫌つて絶対に反對を唱へるもんでね。女て氣が小さいですからね、あツはツはツ。」

と税のかゝらぬ口で盛んに出鱈目る、高利先生は又もや、

「御尤で……。イヤ御婦人はそれが宜しいのです。」

と大きく頷首いた。それは俺が非常に責任を重んずる人間であることを、感激したのである、甘めえもんだなあ。

もう大抵これで充分だらう、三枚におろして、肉は刺身に、骨とあらは煮肴に、頭は潮に、料理はすつかり済んでゐるのだが、尙ほ念の爲め最後の四十二珊を一發、ズドンと食はして止めを刺して置くことにした。

◎飛んだ張良

再びガタンと扉が開いて、今度は書生のHが現れる。

「先生、野田さんからお電話です。」

俺はさも面倒臭いてな顔をして、

「たい野田さんでは解らん、何處の野田さんで、用件は何か、大略を聞いてから取次ぐんだつて、平常から云つてあるぢやないか。」

「莫迦だなあ貴様は……。」

と怒鳴りつける、此の最句の莫迦だなあ一句は脚本には無いので、Tは一寸イヤな顔をして睨み付けたらしかつたが、俺は横を向いて知らん顔をしてゐた。

Tは一旦階下に下りて行つて、復た現れた。

「材木町の野田さんです、奥様が御自身電話口に出て居られます。」

とやる。俺は稍や狼狽したやうな態度で、アタフタと電話口へ駆付ける。無論電話なぞかゝつてゐるのぢやない、HとFが待構えて居て、

「何うだえ、形勢は？」

「有望々々、肉屋と酒屋へ電話をかける。」

「ウワー、萬歳々々。」

斯麼ことを語り合つて、ノツソリ應接室へ引返すと、今度はKの役だ、

「材木町の野田ッて、よく此處の家へ電話のかゝつて來るところだね、誰だい、例の會社の人かね？」

と質く。高利貸などいふ類の人間は、ドウかすると時の大臣の名も、

其の住所などは無論知つて居ない恐れがあるから、かう云ふ必要があるのだ。

「ウン、遞信大臣の野田さ。今度娘さんが嫁入るのでね、面倒くさいことを頼まれて閉口してゐる。」

てな事を言て、唇に火の付き相な葉巻を咬えて、椅子の上にあふん返り返る。大臣を知つてると云ふよりも、其の夫人と懇意にして居る者に對して、世人は一層深き信用と尊敬とを拂ふことを諸君は御承知であらう。従つてかゝる場合に其の官舎を持出しては、平仄が合はないのだ。

「それで大抵御話はすみましたね。失敬ですが、僕は一寸出かけな

くちやなりませんから。』

とそろ／＼追拂ひにかゝる。長居をされちや檻縷が出るから。

我が敬愛なる高井さんは、明日にでも公正證書作成の上にて御用達致しませうと快諾して歸つた。歸るとき俺は敬意を表して玄關まで送つて出た、あツ下駄が直してない、お客様——我々に大枚五百金を貸し與へんとする大恩人に對して、餘りと云へば禮を失する。俺は直ちにTを睨みつけた。

「こら武田、下駄をお直しせぬか。」

Tは素敵な顔をして、俺を睨み殺しさうにした。Kは危なく噴飯しさうにして、向ふを向いてしまつた。

俺は嚴然として、假借する所なく、先生たる暴威を振るつた。

「オイ早く爲ぬかッ。」

俺は遂に、泣き出しさうな面をして、濫々高井さんの下駄を揃へた。

斯くして翌日四百何十圓といふ金が、首尾よく我々の手に入つた。然しTは今でも時々俺に向つて、

「彼の恨みは一生忘れん。」

と云つてゐる。然ら怒るなよ、昔々張良は黄石公の靴を拾つて穿かせたと云ふぢやないか。

成る程御名案

◎保険屋に責められて

Kと俺と、而してSと三人が寄つた時、偶然生命保険の話が出た。口を切つたのはKだ、「俺は近頃保険屋に窘められて弱つちまふ、何とか撃退策は無いかしら」と言ふと、Sが無遠慮に噴飯して、

「餘ッ程目先の利かない外交員だなア。譯あ無いぢやないか、自慢ぢやないか是れ此の通りだつて、眞白な家賃受取證を投げ出してやり給へな。」

と云つた。俺もそれは可なり名案だと思つたが、Kは腹を立て、

「それは頗る卑劣だ、無責任だ、紳士的でない、」と攻撃し、もつと紳士的な方法を考究して呉れないかと懇願した。何でもKの奴、例の虚榮癖から、最初勧誘員を引見した時に、自分は豪農の次男息子で、國へ歸ると金貨や紙幣の唸り聲で騒々しくツて安眠が出来ない、東京で貧乏生活ごっこをしてるのも一寸妙なものだねエ、てな事宜敷吹き立てたらしいんだ、だもの外交員先生金の茶釜でも掘當てた氣で、何うがなして攻め落さんすと、毎日お百度を踏んで居るらしいのである。

「そりや氣の毒だ。Kは自業自得だから、寧ろ大に苦しめられる方がよいが、早く其の外交員を救つてやらなければ……。」

と云ふSの意見には俺も至極賛成だつた。それには、玄關拂ひは舊式だし、第一卑怯だ。と云つてSの如な遣り方は、紳士の體面を傷ける非常な拙劣な方法である。

「それに就て、俺は自ら天下第一案と稱すべき名案を持つてゐるんだ。快く勧誘員を引見し、彼の陳述する保險論に裏書を與へ、紳士の體面を完全に維持し、而して最後に至つて、勧誘員自ら旗を捲いて退却し去る、と云ふ名案があるが何うだ。」

と言つたら、Rは一尺ばかり飛上つて、是非傳授して呉れ給へ頼む、甘く行つたらカフエ位奢るつて喜んだ。

それには俺の叔父の失敗談を、御披露すれば事足れり矣なんだ、賢明なる諸君は、直ちに之に因つて其の秘策を洞察せられる事と信する。

◎俺の叔父の失敗ばなし

俺の叔父は以前に、三ヶ月間ばかり、保險の外交員をやつて居た事があるんだ。當時俺の家の二階に陣取つて、會社へ通つて居たら、俺は自身で勧誘員をやつて居たと同じ位、よく事情を知つてゐる。叔父は多寡が勧誘員の癖に、菊版を二つ切にしたやうな大形の名刺に、

「大光生命保險株式會社

理事補 元野杵太郎」

てな威赫した肩書を附つけて、振廻して歩いたが、頓と成績が
 擧がらぬ。俺の考によると保険と云ふものは、我國では餘り必要が
 ない、富豪は多寡々々二萬や三萬の端金を自分の命に懸ける事もい
 らん、其日暮らしの人間には、却々懸金が續け切れん、寧ろ手取り
 早く無盡講にでも入るか、でなきや簡易保険に入る。だから保険に
 入る必要の有り得るのは、中流所だけである、所が日本の中流所は
 至つて貧弱ぢや、恰も私立大學卒業生の如く、一向取留の無いもの
 である。然もなくば學者であるが、此の學者杯と云ふものは、多く
 保険嫌ひで、

（ドーモ保険に入ると、家族の奴等が僕の死ぬのを待構えて居る様

な氣がしてねエ)

てな事を仰在る。正直なところ學者や文士は、大抵胃病患者だ、
 でなくは結核既往症あり邊の所で、會社の方でも歓迎しない。結局
 外交員の上得意とする所は官吏・會社員・軍人・小商人と云ふ種類で
 あるが、此の上得意に向つては各社の勸誘員が一齊射撃をやり、年
 中窹め抜かれてゐるから、名刺を見るなり警戒を始める、飽迄圖々
 しく構えて、數回の突撃を決行し、遂に申込書に捺印させるには、
 聯合國が支那を參戰させる位の苦心とは較べ物にならん。次に叔父
 の考によると、元來保險外交員が外交員らしい相好・風采をして居る
 のが不可いと云ふんだ。是は敵の第一壘に肉薄せぬ中に、早くも取

次の書生乃至女中の輩に撃退される虞がある、と云ふので叔父の扮装と云へば、そりや實に目覺ましかつたよ。三ツいたら貝五ツ紋打つたる黒紬の羽織、嘉平次平青竹色の袴、黄八丈の着付に大小霰散らしの下着、白博多の帯、糸瓜の帽子、左手に重藤の弓の折、これは杖である。コロツポの下駄に白木綿の足袋、キヤラコでは一日で切れるから。紫縮緬の帛紗包を懐中なしたる品行のよさ。右手には腕に覺えの兜割、腰に用意の握飯……。何うです諸君、斯ういふ異形の人物の訪問を受けた時、諸君の好奇心は、必ず取次の女中に命するに、『兎も角も、應接間へ通して置け』位の事になるでせう。(最前此家の召使が案内する時、異な目付をしよつたが、無理もな

いテ。俺とても是からが男盛りぢやもの。てな事を考へ乍ら、此の扮装で應接間の柔かい革の椅子の上に、泰然自若と御輿を据えて、なた豆の煙管を腰から一抽に及び、蓬臭い黄色の煙をスバ／＼やつて居るんだから、△△會社専務取締役法學士金尾毛多内氏が、

「や、お待たせしました。フム、貴君ですか元野奎太郎君と仰在るのは。」

と名刺と當人とを引合せて、迂散臭い目を光らせ、(成る程、變つてゐるなア)と呟いたのは當然であらうと思ふ。叔父は又叔父で(臍下丹田、々々々々)を唱へて居る。そこで主人側は、

「して御用件は。」

と、極つて斯う出て来る。

「おい君、俺達は保険の勧誘法を教えて欲しいんぢやないよ。」
とKが少し焦れるのを、Sは手を振つて、

「話の腰を折るな。何うせ君なんぞ一日の中十二時間を眠つて、八時間を遊び暮らして、後の四時間を持餘して居る人間ぢやないか。」
とたしなめる。

これからが、彌々叔父の大奮闘時代、一息吐いて辯じるとせう。

◎エツ、あの三萬圓！

「然ればてゐる、抑々人間の果敢なきは、朝に紅顔の美少年も夕に

白髮蹉跎の歎あり、壯にして後圖を爲さずむば、老來悲傷の涙に
掻き呉るゝとも復せむ術もあらざりけらし、況んや珠玉碎け易く
財寶散じ去る速かなるをや如何ぞ今日の富と安きとに夷然として
老後子孫の計をなさずして可ならんや、不肖奎太郎夙に思を茲に
ひそめ、他人の憂を憂となして其の手段を案ずるに、歐米の先覺
亦懷を同じうするありしか、茲に生命保険の設けあり、神國王政
復古以來舊弊頑固の氣を排し廣く文明開化の風を移入し、生命保
險の制亦來たり遷り、遂に今日の隆盛をなす、其の然る所以のも
のは、エ、ト、大方の士一律其の緊要なるを悟れるが故ならまし

……」

「エ、鳥渡鳥渡。」

折角朗々と暗誦して居る所を、呼止められて、叔父さん眼を開いて見ると、既に電燈が點いて急に室が明るくなつて居た。

「貴君は、つまり保険の勧誘に來られたのですな。失敬だが僕は今日には急な用事があるのでね。何なら又にして呉れ給へな。」

とそろ／＼撃退に取かゝつた相だ。叔父はもう一生懸命さ。

「さ其處で御座る、朝に紅顔夕に白髪、何某の聖僧はますほのすゝき、ますほのすゝきを知らんが爲に豪雨を胃して……」

「併し、僕は少くとも此處數日は死にはしないから、ハ、ハ、ハ。」

「笑ひ事では御座らん、不肖奎太郎翻然悟る所あり、先祖相傳の犁

鋤を擲つて此の職に従ひつゝある所以のものは、偏に博愛聖人の道を弘通せしめんが爲で御座れば、諸々の罵言惡口刀杖瓦石、固より忍ぶ所で御座る。是非此の禿げた頭に免じて、保険に加入して頂き度う御座る。」

否と言は、夫れ腰に差したる兜割!

「左様ですか、宜しい入りませう。」

「ハ、ツ、有難う御座る。額は何程で……。」

「三萬圓入りませう。」

叔父は夢ぢやないかと、股をキユツと掴つて見たさうだ。

「彼の三萬圓!。エ、ト千圓で二圓五十錢、一萬圓で二十五圓、三

萬圓で七十五圓の倍額増しと、李太郎感泣仕る。何卒是へ御記名捺印、それから御原籍寄留地、當年何十何歳、乃至御家族の數、奥方御迎への年月、各相當欄へ。」

「解つてる、解つてる。ぢや是で宜しいね。元野さんとやら、暇な時又ちと遊びに来給へ。ブツ異つてるなア。」

感歎の聲を後にして、其の夜叔父は、ビーコンスプイルドが柏林會議から倫敦へ引揚げた時の如き、絶大の光榮と歡喜とを持って凱旋して來たよ。何しろ過去三ヶ月努力して、五百圓の口を一口取つた限りだからね。其の晩は無論申込書を抱いて寝たがね。一晚まんぢりともしなかつたらしいんだ。夜が明けるのを待兼ねて、割引電

車で會社へ突撃の、呆氣に取られた小使を叱り飛ばして、

「外交部長は如何した、重役共は未だ出て來ぬかッ。何ちう野呂馬の時計だい。もつと針をドシム〜進めろ〜。」

なんて夢中で號令をかけて居たに相違ない。漸次集まつた外交員共が叔父を真ん中に圓陣を作り、驚きと羨望の眼を鼻の如に張つて、

「會社創立以來のレコードだ。何して君は其麼エラ物を射留めたんだい。エ? 後學の爲だ、其の間の消息乃至秘策を漏らし給へな。」

なご、騒ぎ立てる、叔父はこみ上げて來る歡喜を無理に抑へ付けの、
「君等は何の爲に、車を飛ばして歩いてるんだい。俺は又、何うしたら勸誘を謝絶られるものか、それが聞き度いと思つてるんだ。」

てな事を言て收まつて居たらしいんだ。俺は若し叔父の此の情態が、更に一兩日も繼續したら、吳博士を訪問して「精神病患者の初期徴候」に就て聽きたいさなければならぬ哩と、尠からず氣を揉んで居たが、幸にして一時的發作に止まり、國許の叔母へ電報を打つに至らずして濟んだ。何故ならば、會社に於て調査の結果、例の三萬圓の口は、幽靈會社の重役で財産なぞ一文もない男、持つてゐるものは遺傳症ばかりだ。千圓以上は會社の方で謝絶ると云ふことに決定したんだ。

叔父は憤然、慨然として、勸誘員を辭職してしまつたのさ。

こん子の外交術

◎俺の妻君は賢夫人

出社して未だ物の十分と經たぬ頃、

「多々良さん、お宅から電話ですよー。」
と來た、俺は胸がドキンとした。

これも出社したばかりで、眼を皿のやうにして、十幾つといふ都下の各新聞を點検してゐたY君までが、鎌首を持上げて、

「珍らしいことがあるものですね。」

と、不審議さうな顔をして俺を見た、實際俺とても（珍らしいこと

だ、不審議なことがあるものだ」と思つた。斯く思ふに所以ありけり、それは斯うなんだ、Y君は毎に斯ういつて感嘆してゐる男である、

「多々良さんの奥さんは賢夫人ですなア、私は此社に来てもう三年になるけれど、貴下のお宅から電話のかゝつたのを聞いたことがない。ちよいと〜お宅へ歸られない事だつて、あるやうだけれど。」然う云はれる時、俺は頗る得意なもので、

「妬いてみたつて仕方がないと思つてるんだらう。」

「それが偉いですなア、一寸出来ない事ですよ。又妬く妬かないは別問題としても、いろ〜家上のことで、急に用事の出来ない

つて事も無いでせうに、さう云ふ事件は貴下ン所には起らないんですか。」

「そりや突發事件が無いとは限らんさ、だけど僕の家では完全に分業が行はれてゐる、家上の事は女房に全權委任、その代り屋外に於ける亭主の一切の行動に容喙すべからずと、ね。互ひに相援けるといふことになる、勢ひ干渉が入るから、互ひに其の分を守つて相援けざる事つてことにしてあるのさ。」

「偉いですなア、珍らしい賢夫人ですなア。そりや貴下餘ッ程奥様を大切にして上げなさらなくちやア。少し愚妻をお宅へ出して、教育して戴きたいですなア。」

とY君 悉く感服して、俺の妻君を遂うく賢夫人にしてしまった。だから俺はY君が一番好きなんだ、此間月給を上げるやうに運動してやつたのだつて、『賢夫人』に對する俺の寸志さ。

「オイ芳子、Y君が、お前のことを世にも稀なる賢夫人だつて云つて居たよ。」

「あら然う？、今度入らしたら洋食を御馳走しませう。」

それ見る妻君だつて、悪い氣はしないんだな、ニンガリ笑つたぞ。

「何故だか知つてるかい？」

「言つて下さい、その賢夫人たる所以を……。」

「ナニ詰らん事を感心してゐるのさ、お前が未だ一度も社へ電話を

掛けたことがない、そこが偉いつて云ふんだよ。」

「何かと思つたら、そんな下らないこと感心してゐるんですか。」

蛙の眼玉に水をかけたてな、如何にも詰らなさ相な顔をした。

「處がY君に云はせると、それが詰らなくないんだね、一事を以て萬事を推すに足るつて云ふんだ。男が社へ出るのは恰も古の武士が戰場へ出るに等し、仕事は戦争である、その矢叫の音雄たけびの聲激しき戦争の眞際中へ、下らぬ家事のことで電話をかけるなどは、全く戦場の勇士をして内顧の患有らしむるものである、貴下のお宅だつて屹度伯母さんが來たとか、子供さんが溝へ落ちたとか、いろいろの事件が起るに相違ない、それを悉く奥さん一人

で切廻して、出先の亭主に毫末も内顧の患無からしむると云ふは、偉いッ。此頃に妻君を遣すから少し教育してやつて呉れつて、云つて居たよ。」

「大層偉くなつてしまつたのね、だけど眞實に來られちや困るわネ、妾矢張り正直なお話しますよ、社なぞへ滅多に電話なんか掛けてみる離縁だぞと、亭主が申しますからと、ね、好いでせう。」

「莫迦だなア、そんなことを言へば折角の賢夫人が、フイになつてしまふぢやないか。社長がまた其の話を聞いてゐてね、そりや全く偉い、一寸も知らなかつたが、多々良君の事務上の能率増進は全く其の夫人にある、社中の模範夫人だ、何ういふ方か、此頃に

お邪魔をして、お目にかゝり度いつて云つて居たよ。」

「眞實に社長さん、入らつしやるでせうか。」

「來るだらう、あんな平民的な人だから。」

「困つたわネ、家には未だ冬の座布団が無いんですよ、何時入らつしやるでせう、二三日中でせうか？」

「ウフ、氣が早いなア、社長の一件はお景物だよ。」

「そんなに急には來ないだらう、座布団なぞ何うだつて好いちやないか、夏布団を出して置くさ、それが却つて好いよ、すると社長はオヤ冬布団が無いんだな、氣の毒だなあと感じて月給を上げてくれるかも知れんからね。」

社は戦場の説なんか、自分ながら巧いことを云つたものだと感じ、感心、時々其の戦場の大本營が、木挽町の何々家て家の字のつくやうな場所に移轉するんだもの、電話で偵察なんかされては、危なくて仕様がな。斯うして賢夫人に祭り上げて置けば、賢夫人の手前、どうしたつても電話なぞ掛けられた義理では無かる。へッ賢夫人なる哉、賢夫人なる哉。

◎一大椿事々々々

そこへ此の電話である、不思議だなアの次の瞬間には、

(一大椿事出来!!)

ピカリ、とそれが電光のやうに俺の頭に閃いた。兎に角妻君が多年

の慎しみを破つて、「賢夫人」を棒に振るほどの事件に相違ない。俺は決然として起つて、

「給仕、自動車を呼べッ。」

と號令をかけて、直ちに電話室へ突貫した。蓋し俺は平常妻君から、

(貴下のやうに呑氣でも困りますよ、一家の主人ですもの、も少し確乎して下さらなくちやア)

と口癖の如くに云はれてゐるんである、この點は妻君亭主の人格を解せざるも亦甚矣と謂はざるべからず、俺の呑氣は天性——ではない、修養の力である、性急が寧ろ俺の天性なのだ、性急は安ッぽく見えるから、俺は勉めて悠然と構えこんでゐるに過ぎない、だから

豫て機會だにあらば、俺が如何に敏捷にして頼母しき人物であるかを立證して妻君を安心させてやらふと心掛けて居たのである。乃ち受話器を執る、へうん然うか諾し、後は歸つてから聞くツ。ガタン、チリ、ン、ドンくくく(階段を駆降りる音)、(オイ中澁谷だ、全速力でやれ。)ブーくくく、(まア嬉しい、早かつたわねえ)、(何うでエ、平常は呑氣でも、一大事となればザツと斯麼ものぞ。へてな具合にやつて退けうといふ手筈である。

受話器を執つた、耳に當てた、ブルツと震へた。青島で「さらし船」と間違へてダイナマイトを嘗めた時よりも、變な氣がした。「な、な、何だい。」と危ふく天性瀑露に及ばんとする所を、ぐツと臍下丹

田に、引こんでろ、引こんでろ、落着いてツ。

「おい、僕だよ、何か用か。」

「貴下？」

「うん、然うだよ。」

「聲が少し違ふわネ、何誰？」

「僕だよ、俺だよツ。」

「貴下、三ちゃん？」

「えッ。」

「妾。わかッて？」

「なあーんだ、君か。」

「オホッ、お生憎さま。いやに亭主聲を出してるのね、貴下奥さんと話するとき、毎もそんな聲を出すの。」

「此ン畜生笑ひ事ぢやないぞ、ほんとうに。」

「オホッ、オホッ、お腹が痛い。ご免なさい。」

「人を驚ろかして嬉しがつてるね、獸奴！」

「まあ？、紳士がそんな口の利きやうするものぢやなくてよ。」

「はい〜左様で。處で何だい用件は？」

「貴下、今忙しい？」

「忙しいにも忙しくないにも、只今御出社遊ばされたばつかしだ。」

「さう？、忙しいとこ濟みませんが、一寸出て来て下さいな。手間

取るかも知れないんですから、社の方を晩まで歸らないで好いやうにしてね……。」

「何か、急用でも起つたのかい。」

「え、少ウしばかり。」

「然うか、では都合して行かう。……だけど一體どんな事件だい。」

「事件？、事件つていふ言葉は貴下の商賣上の術語だわね。」

「オイ〜、そんな言葉咎めなぞ止せよ、何だい用件は？」

「抑も本事件の内容は……、巧いでせう。悉皆覚えてしまつてよ。」

俺は思った、冗談なぞ言つてるやうでは、こりや大した事件ぢやないぞ。

◎是には種々事情がある

「その事件の内容は……、ちと言ひにくいわ。内容を云はなければ、来ちや下さらさないの？、又その内容如何に依つては、来ちや下さらさないの？」

それ見ろ、大した事でも何でもないんだ、だから逆襲して来たんだ。然し其の内容の如何に拘らず、俺は出かけるよ、有名な賢夫人から電話のかつたことはY君が證明して呉れるもの、社を出るには最も都合が好いんだ。

「然ういふ譯ではないが、言つたつて好いちやないか。」

「それは言ひますよ、何うせ會へばわかる事なんですもの、……で

も怒つちやいけませんよ、そんな野暮な貴下でも無いわネ。」

「イヤに煽てるね、後が怖いや。」

「實はね、子供が怪我をしたの。それで今から病院へ連れて行くの。」

「子供ッ！」

俺の頭はビーンと鳴つた。或る種の不安が、俺をグツと掴んだ。

「子供ッて、何處の子供だい？」

俺の聲は震へてゐたやうだ。(豈夫？、そんな女では)とは思ふん

だが、ア、何卒神様、佛様、エス様、阿彌陀様、薬師如来、八幡様、天照皇大神、諸君の御力を持ちまして、願はくは、テないやうに(私は今恐ろしい想像をしてゐます、不安に捕へられてゐます)、拂ひ玉

へ浄め給へ。

「妾の子供。」

畜生！、何てキツバリした答だ、オツ／＼でもする事か。

（ア、知らなんだ、知らなんだ、奴に子供が有らうなんて、知らなんだ、それを今の今まで俺に隠してゐるとは、憎むべき奴だ、詐欺的行爲だ。畜生ッ何うしてやらうか。行くもんか。畜生ッ！）俺の頭はドシンと、三村次郎左衛門の大槌でどやし付けられた如く、ピシャンコになつた。そツと手を舉げて撫で、見た、まア好かつた何ともなつては居ない。

「驚ろいたでせう？、然しこれにはいろいろ譯があるの、その譯も

お話ししたいし、兎に角直ぐに来て下さいな、来て下さる御親切があつたら……。」

御親切があるならとは、好い度胸だぞ。往こか往くまいかと、軟派と硬派が俺の頭の中ででんぐりがへつてゐる、往つては男が立たぬやうな氣もする、往かねば男の立たぬやうな氣もする。

「来るの來ないの？、早く返事をして下さいよ、怪我人を抱えてゐんですから。」

「行く、兎も角も。」

「兎も角も——ですか。まあ何でも好いわ、ぢやあ妾、築地の海岸のところをぶら／＼散歩してゐますから。」

チリンと電話を切つて、俺はふらふらと、魄の抜けた亡者のやうな面をして卓子に戻つた。

◎往こか、往くまいか思案橋

「多々良さん、自働車が来て待つてますよ。」

「ヒエーン。」

何だつて自働車なんか呼んだんだらう、俺は餘つ程慌て者だなア。

「御病人でも出来たのぢやありませんか。」

と何にも知らないY君は、悉く憂色面に現れてゐる、友の憂を以て憂とする、御親切は有難いぞ。

「ナニ、一寸怪我をしたらしいんだ。」

「えッそりや大變だ、お宅から電話だから、何でも一大椿事に相違ないと思つて、實は心配して居た處です、そりや大變だ。」

へッ、あゝ耳が痛い。

「奥さんですか、お嬢さんですかッ。」

「子供が……。」

「そりや大變だ、すぐお歸りなさい。後は何うにでも私が……。」

煩さいなア、一々大變だ／＼と、大變とは大に變ると書くンだせ、そんな子供なんか——淫奔女の罪の塊なんか、死んでしまつた方が好かる、その子供の爲にも、又奴の爲にも。

（呀ッ、俺はウツカリ、Yに飛んだことを饒舌つちまつた。）

愕然として、手を口に當てたが、覆水盆に返らず況んや一度發したる言葉をや。

往くとは云つたものゝ、往くべきか往くべからざるかと、尙ほ俺は頗る迷つた。子供なんかある女——子供がある位だから亭主もあるんだらう、尠くも曾て有つたのだらう、てなければ情夫があつたのだらう、それは藝妓になつてからか？、それとも學生時代か？、は、——學生時代だな、その男には棄てられる、家は勘當される、それで已むを得ず藝妓になり下つたんだな、墮落學生の成れの果か彼女は！、愈々以て厭な女だなア、そんな女とは知らずに俺は、(お、マイ、スキトハート)なんてベツベツだ。然は然りながら退いて

考へて見れば、俺だつて女房も子供もある、俺だつて最初はそれを奴に秘してゐたんだ、それが爲め稻毛の海岸で、ギウギウ女から取ちめられたんだ、それで別れるつて云ふかと思つたら、
(そんな野暮な、水くさい妾ぢやありません。)
て言やがつた、だから俺は、

(黒人てものはさばけてゐるなア、度量が大きいなア。)
と悉く感心しちまつて、頸に嚙りついてオー、マイ、スキトハートをやつたんだ。それにしても少々さばけ過ぎてると思つたら、矢張り自分にも弱い尻があつたからだ、なあんの事たい。而もその時に「實は妾も」と出ず、又俺に嗅ぎ付けられもせぬ前に、こんな中途半

ばな時を計らつて、電話で簡単に、子供が病氣一寸来て下さいな、とは呆れ返つた奴だ。然し、奴の作戦計畫は巧いなア、機會を捕へるに巧みだなア。子供が怪我をした、眞白の繃帯に包まれて、クンクン唸き乍ら寢臺の上に横つてゐる、その前に俺を引据えて置いて、そのいろくの事情と云ふやつを、涙と共に語り出さうと云ふんだな、而して俺をほろりとさせて置いて、

(ね貴下、解つたでせう。何も彼も斯うして白状してしまつたんだから、これからは一層可愛がつて下さいな、この可憐な女を慰めて下さいな。)

とお出なさうと計畫だナ。イヤどうも流石に、東洋のマキヤペリ

ーを以て任ずる俺のスキトハートだけあつて、行ることが、五分の隙もなし。

處で、それでも未だ俺が熊蜂みたいに、ブンブン怒つてゐるとする、すると女は屹度、

(だつて何方も、五分々々ぢやないの。どうせ藝妓なんかする女ですもの、事情があるに極つてますよ。貴下も△△△△なんかにして癖に、随分野暮くつたいわネ。ア、妾は貫下て人を見そくなつて居ました。)

と毒ついて来るだらう、屹度さう棄鉢に出て来るに相違ない、来るんですか来ないのでですか、何方?、さあ早く!と強硬に出た處に、

既にその徴候が現れてゐるツ。こゝは一つ寧ろ敵の裏を搔いて、驚ろくばかり洒然と出てやらう、

(一體、だ、誰の子だい。)

と怒鳴る代りに、如何にも同情の念に堪へぬてな態度を持ち、能ふべくんば、ほろ／＼と其の子供の上に熱い涙を流してやらう。而して若し女が過去の歴史を語り始めたならば、俺は手を振つて、

(何にも云てくれるな、僕は君のその悲しい話を聞くに堪へない。と體よく逃げてやらう、「身の上話」と云へば物悲しげに聞こえるけれど、要するに一種のおのろけに過ぎぬからなア。須らく忌避する方が、惻怛だテ。

よし往かう。自動車で行かう。一朝大事に際會すれば斯の如く敏捷であると言ふ例の意氣で駆付けよう、廢物利用だよなんて、そんな餘計なことを言ふ必要はない。

俺は、斯く臍を極めると、決然として起つた。

「ではY君後を頼むよ、兎も角ちよつと宅へ行つてくるからね。」

◎それ、人形ぢやないか

「オイ子供が怪我をしたのだ、急いで呉れ。」

委細承知と運轉手は把手を握つた。ブ／＼／＼。社から築地の海岸までは、歩いたところで十分位のもの、自動車では却つて呆氣ない。

オヤ居ないぞ、違つたかな、確かに築地の海岸と云つたやうだつたが……、それとも待兼ねて病院へ行つてしまつたのかしら、それでは折角の自働車が犬死だ。も少し向ふへ行つて見ると、メトロポールホテル（其頃在つた、今は無くなつた）の角を曲ると、向ふからぶらり〜行つて来る。呑氣な奴だな俵にも乗らないで、徒歩つてるね、いよ〜こりや大山鳴動鼠一疋、大した怪我ではないんだな、何だい詰らねエ。

兎も角自働車をビタリと止めて、飛降りた。

「早かつたわネ、妾話を切るとすぐ、電車で来たんですけれど……。」
「何うした子供は……。」

「子供？、こゝに、ほら。可愛いでせう。」

「それ？、人形ぢやないか。」

「え、これ妾の子供よ、名は三ちゃんて云ふの。坊や眼々おあけ、阿父さんが入らしてよ。」

「なあーンだいい。」

運轉手奴クスリと笑つたぞ。ア、已ぬる哉、俺の太平洋の如き度量お釋迦様の如き大慈悲、電光の如き敏捷、悉く水泡である。

「でも憾心だわ、見かけよりも内心は親切なのね。」だとさ。

人形の足と手指を、鼠がかちつたから、淺草の人形病院へ入院させるんだといふ、實に光榮あるお伴をば仰付かつたりける、何て

間が好いでせう。

兎も角二人は自動車に乗つた、そして其の淺草の人形病院とかへ走つた。俺は車中徐ろに悲觀せざるを得なかつた、これが苟くも△△△社の△△部長たる堂々たる男一疋の本日の仕事であるかと思ふとね。我が賢夫人芳子さんが聞いたら、

（貴下藝妓遊びを悪いとは言ひませんが、少しは自重して下さいよ。何ですか藝妓と相乗りで、人形のこはれたのを、自動車で運んでゆくとは……！）

と泣いて武者振り付くだらう。許して給へ許して給へ、成事も成行だ、仕方がない。

◎外交術が巧いでせう

俺の悲觀に引替えて、とん子（この女が新橋藝妓とん子であることは、賢明なる讀者の既に推知せらるゝ處であらう）の操ぐこと、御機嫌の好いこと。

「此の三ちやんを病院へ届けて置いて、それから二人で逗子へ行きませう、今日は其の積りで巧く家を出て來たんですから。」

「餘まり突然だなア」

「突然で驚ろく柄ですか。それともお厭なら……。」

「脅かすなよ、氣が弱いんだから……。厭だと云つたら何うする。」

「外に一人、喜んで行くのがあつてよ。」

「ちヨ、ちヨ、ちよツと待つてくれ。」

今日とん子が家を出て来たのは斯ういふ仕未である。豫てとん子を追駈まはしてゐる山さんなる人がある、それは俺も薄々風の便りに知らんでない、金持の息子で男振りだツて悪くはない、だがとん子は此の男を虫が好かない相である、當人が云ふんだからよも間違ひはあるまい、處で山さん今度商用で大坂へ一週間ほど行くことになつた、その七日間の用件を六日に切詰め、一日だけカンニングをやつて、とん子と共に箱根に納まらふと、未だ室住の分際で太い了見を起したものだ、腹に一物あるとん子は珍らしくもイエス、オーライと返事した、山さん三拜九拜した相である、而して今朝になつ

て山さんの社へ電話をかけて、例の「子供の病氣」を持出したんださうである。

（へッ、君に子供があるのかい、ちツ、ちツとも知らなかつた。）

と、電話で顔は見えないが、豆鐵砲をくらツた鳩みみたいな顔をして、愕ろいてゐた相である、そりや驚ろいたろサ、此の俺だツて實は。

（でね、是から其の子供を連れて病院へ行くんですの、だけれど妾子供のゐるツてこと家へも内緒にしてゐるんですからね、人氣にかゝりますからね、貴下だから打明けるのよ、だから家の方は矢張り今日貴下と一緒に箱根へ行つたことにしておいて頂戴な、遠出の玉や祝儀は妾の方で待合へ拂つておきますから。こんな事、

野暮なお客には逆もお願ひ出来ませんわ。

とやつた相だ、すると山さん悉皆納まつて、

「好いよ、好いよ、安心して行つて來給へ、待合の方だつて心配しなくて好いよ、それは僕がお見舞として上げるから。」

と云つた相だ。その結論に曰く、

「外交術が巧いでせう。男て甘いもンね。」

だと、恐れ入つた。オホン！、色男にや誰がなるツ、そそそんなにして迄も、こここの俺と行き度いのか、うい奴可愛い奴、一寸握手せう。

「だから貴下がお厭なら、山さんを又誘ひ出すまでよ。三拜九拜し

て、歸りには指輪くらゐ買つてくれることよ。」

や、脅かすこと〜。

「ぢやア然うするさ。武士は相身互ひだ、僕は寧ろ山さんに同情するからね。」

「ぢやア然うしますよ、後で怒つちやいけないことよ。止めるんなら今の間よ。」

「子供のある藝妓なんかに、誰が關ふもんか。」

「貴下も随分、人が悪くなつたわね。」

「でも逆も、お師匠様の半分ほどでもない。」

淺草から廻れ右をして、更に自動車を品川驛まで飛ばせて、そこ

から一寸社へ電話をかけて、子供の怪我は極く軽い、賢夫人も流石に少々慌てた（芳子勘辨してくれ、然う云はないと社の奴共がおせつかいに見舞にでも出かけると、それ直ぐ悪事露見だからね、亭主の恥は女房の恥だ、我慢せろ）、心配してくれるな、然し今日は他に用事もあるから失敬する、後は萬事よろしくと、大いに部長振りを發揮して置いて、さあ是れで好い行かうよとん子、お前とならば何處までも……。

◎陸軍中將閣下

近い新橋驛を避けたのも、御身分不相應の三等室にもぐり込んだのも、共にお忍びの旅行だからである。

返子は養神亭へと志した。

驛前から葉山の方へ行く乗合自動車は、其頃から有つた。俺は自動車で行くことを主張したが、とん子は赤毛布臭いと云つて、強てテクを主張した、未だ自動車の物珍らしい頃だもんで、金の無い奴が乗合自動車で其の好奇心を満足させた時代だから。牝鶏晨を告ぐるとき牡鶏之に和す、是れ天下泰平一家和合の妙諦なりと心得て、終にぶら／＼歩るいて行くことに決した。彼の時自動車でぶツ飛ばせてしまへば、あんな算盤責めの拷問は受けなかつたんだに、兎角に女賢しきは牛賣りそこなふ。

富士見橋の欄杆が見え初めた時、俺はとん子に注意した。

「さあ是より五六町の間は、要塞地帯だよ、警戒しなきやア。」
 するととん子は、要塞地帯はもつと先へ寄つた葉山の海岸だと云つて笑つた。

「然うぢやないんだよ、そら向ふから職工みたやうな男が、此方へ歩いて来るだらう、彼の邊に僕の極く懇意にしてゐる將軍の家があるんだよ、知らんかね？、豫備の中將で△△と云つて、同郷の先輩なんだ。」

と云ふと、とん子も御高名は豫て承つてゐると云つた。然うだらう、サクスキー村の豪傑で、時々「机の塵」邊を賑はす有名な人物だから……。俺は此の將軍とは非常に懇意である、五六度も遊びに行

つて、その都度御馳走になつた、だから子供や女中に目つかつても都合が悪い——と云ふ事を廣告旁た吹聴した、こんな偉い人、苟くも閣下と呼ばれる人を友達に持つてゐることは、須らくとん子に熟知せしめて置くべき必要ありと認めたからである。それ見るとん子は、

（あら然う、頼母しいわネ。）てな顔をした哩。

事實は往々にして小説よりも奇である。古ぼけた中折、羽織も着ないでブラ／＼やつて來た、その職工みたやうな男が、實に我が敬愛する中將閣下其の人に外ならぬことを、俺が発見した頃には、生憎なものだ向ふでも俺達を發見して居た、軍人なんて年を取ても眼

は好いからなア、而も一筋道と來てゐる。

「やあ。」

と將軍は鬼をひしぐ髯つ面から、ニコ／＼と笑をこぼしながら、

「今日はお揃ひだね。好い處で會つた、も一足違ひで留守になる所だつたね。」

何うして其の一足が、違つてくれなかつたんだい。然し閣下は敢てとん子を知つてる譯ぢやないのだからと、俺はうんと膽を据えた、とん子も覺悟を極めたらしい。そこで俺は亭主聲を出して、

「オイとん……(とドッコイ)此方が閣下だよ。閣下これが私の……。」と紹介した。但し「私の……。」で中斷して置いた、豊夫第二號でござ

いとも云へないし、女房だと云へば長者を欺くことになる、即ちの打切つた處に、千萬無量の苦心が存してゐる、後日に至つて若し閣下が(オイ貴様は不埒な奴だぞ)と云つたら(何時僕が彼の女を妻だと云つて紹介しましたか、私のと云つた限りですよ)と尻捲る心底である、感心な心掛ぢやろ。

とん子も然る者、肩に纏へるウエールを取つて、いと慇懃に一揖し、將に丹花の唇を綻ばせむとするのを、とん子の奴如何様の挨拶をするか、實は俺もお手並拜見と構え込んでゐたんだが、磊落なる中將は、

「好い／＼、解つてる／＼。さあ來給へ／＼。」

廻れ右前へオイをして、先に立つてズン／＼引返してゆく。とん子は頻りに百搔いて、俺の横ッ腹をこづく。

「閣下、お出かけの所なのでせう？」

這れるだけは這れんづと試みたが、閣下は済ましたものだ。

「ナニ一寸も關はん、餘り退屈だから、例のへボ將棋でも差さうかと、出かけたところサ、好敵ござんなれた、此頃また強くなつたぞ。」

俺達を以ててつきり、自分を訪問の爲めやつて來たと、勝手に獨斷して、毫末の疑ひを挟まんのだから始末が悪い、夫れ步兵操典綱領に曰く、「獨斷ハ…常ニ上級指揮官ノ意圖ヲ付度シ必ス其範圍ニ於

テスベキモノトス」と、是れ位のことを知らんのかしら、中將にもなつてゐる癖に…。

俺達は屠所に引かるゝ羊の態で、終に△△家の門をくゞつた。

將軍はさも愉快氣に、遠からん者は音にも聞けてな蠻聲を張り上げて、

「オーイ、珍客々々。」

◎俺は知らんよ、責任は無いよ

とん子は多々良三平夫人として、中將に依つて中將夫人に紹介せられた。俺は知らんよ責任は無いよ。

「毎度宅が、お伺ひ致しまして……。」

フ、ムとん子夫人なかく鮮かだぞ、その調子で頼んだ。
 「赤さん、さぞお御大きくお成り遊ばしたで御座いませうね、もう
 這々なさいますか。」

とん子夫人早くもグツと行き詰まる、可愛相に未だ子供を持つた
 (人形の外は)経験は無いんだもの、生後何ヶ月にして這々を遊ばし
 ますものか、御存知あらう筈がない。知つてゐれば怪しいんだぞ。

「ハイ、漸やく此頃少ウしばかり……。」

は、ア「糧據敵」て主義だな、うまいな。

「今日は乳母さんとお留守居でございませうか。」

「はア。」

は、アは窮したね、俺は乳母やなんか置く身分ぢやないせ、三平夫人
 は今頃赤さんを背中へ縛りつけて襦袢でも洗つてるだろ。

「オイ何をぼんやりしてるのかね、お祝物を頂戴したお禮を……。」

と俺は、暗討に剣突を喰はせてやつた。先刻の人形一件の敵討たい。

「あら何うしませう申し遅れまして。其節は又結構なお祝物を戴き
 まして……。」

「否、却つて御丁寧な御返禮で、あれでは却つて御心配をかけたや
 うなもので……ほんとに濟みませんでした。」

月次が一通り終へると、奥さんは酒の支度でも爲られるんだらう、
 奥へ引込んで行かれた。これで一先づ安堵といふものだ、女二人を

突合せて置くのが一番危険だ、何をしやべり出すか知れたものでない。

「多々良君、その間に一寸一席。」

將棋盤が持ち出された。酒に次いで閣下の好きなものは將棋である、閣下の説に従へば、戦争と將棋は同じものだ、將棋に強き者は戦争も上手である、陸軍大學で圖上戦術といふものをやる、名は嚴めしいが將棋の一種さ、たゞ異ふ點は、敵の兵を捕虜として直ちに味方の軍に従はしめる、これのみは實戦には無いことだ——てな大風なことを仰在るが、勝負は俺と互角である、して見ると俺も軍人なら中將級だ、へエ中將だよ、たゞ異ふのは金鷄勳章が無いばかりだ。

處が、今日は頗る旗色が悪い、ドーしたと云ふんだい。

「おい多々良君、今日はドウかしちよらんか、軍容支離滅裂ぢやぞ。」

「ナ—ニ大丈夫、こ—つと縛ねる、約へる、飛ぶ。矢張死か。」

「ハッハッハッ、不レ知ニ戦地、不レ知ニ戦日、則左不レ能レ救レ右、右不レ能レ救レ後、後不レ能レ救レ前、况遠者數十里、近者數里乎だね、何うだ降參か。」

「何の、然らば恁う行く、おつと居るな桂ちやん、此方が飛車か、む可けない、其處な桂馬退りちらう目ざわりだ。」

「アハ、窮したりな、敵の司令官の號令で、退却するやうな弱卒は、日本軍にや一人も居ないぞ。」

「さあ失敗つたか二人扶持と。」

「さあ失敗つなか二人扶持と。」

「其處だテ金蘭茶の袴と。」

「それではコーして、伊賀様百萬石と。」

「や、又負けたか。」

◎是非伺はれて堪るものか

三番立て續けにやられた處へ、丁度酒が出た。

「奥さん、一杯ぐらゐは可いぢやらう。」

と盃をさし付けられて、とん子柄にもなく羞恥み、

「はアもう何うぞ、至つて不調法で御座いますから……。」

さもく生れて始めて御酒を戴きますてな様子をして、ちよぼ口でチビ、嘗める、彼のしほらしさ。動ともすればグーイと、猛烈にコップ酒をも呷りつける口で。

「ね貴下、奥さんのお美しいこと。多々良さんの奥さんだから屹度、お美しいには相違ないと想像してゐたんですけれど、迎もお子持とは見えませぬわネ。」

あれ又始めた、危ないく。酒三行、四行、五行。めぐるに連れて閣下は益々御機嫌、此方は愈々お尻がムヅク。お酌ツ振りがうまいと賞められた時なんか、實際ヒヤリとして、(萬一したら、右の手の撥蝟でも目つけられたんぢやないかしら。)

然し兎も角もとん子の奮戦努力に依つて、馬脚を現さずに済んだ無理に御飯まで詰込まれて、挨拶もそこ〜に門外へ飛出しの、二人顔見合せてほつと一息、御見送りの手前、先づ停車場まで引揚げて、更めて自動車に幌を掛けブーブー。

車の中で、とん子こぼすことかこぼすまいことか、早く宿へ行つて悠乎御飯でも戴かなくちやアと、此の上未だ飯を食ふ氣かと云へば、だつて皆な腹へは入らずに肝臓へでも行つたんでせう、門を出たら急にお腹が空いてしまつたとサ。

「でも妾何だか嬉しかつてよ、陸軍中將から奥さん奥さんと呼びたんですもの、だから妾歸る時、東京へ御出掛の節は、是非々々

お立寄下さいつて、幾度も幾度も念を押して云つて置いて上げたわ、そしたら奥さん、是非伺ひますつて、屹度此頃に入らつしやることよ。」

と、とん子の奴クス〜笑つてゐた。チエ、是非伺はれて堪るものか。

著者曰く、奇劇も此の邊のところて打止めになると、實に以て淡泊してゐて好いんだけれど、このとん子といふ女が大茶目で、そこへ俺が少〜凸ちやんと來てゐるんだから、なか〜麼んな生やさしい事では納まらない。返子から平塚へ延して行つて、ぶつ

け一週間、茶目の限りを悉した揚句が、とう／＼一大椿事を惹起して、ペンを搔かねばならぬ始末になつちやつた。毛頭作り事は無之、實際こんな馬鹿も行つて来たといふ處に、面白味があればあるのだ。さて是より如何相成りまするか、一寸一息入れまして……。但し休憩時間が一寸長いよ、此の次の本に書くんだから。

鼻眼鏡の宙返り

◎外国風俗

某年某月某日銀座街頭に於て斯くの如き大事件起れり——と、世界の歴史の一頁に留め置くべき程の事件であるか否やは、よろしく諸君の鑑定に委せて置く。

一月の末の或る日の夕方、俺は銀座尾張町で電車を待つてゐた。それがカフェライオンの前であらうと、山崎洋服店の前であらうと、若しくは服部時計店の前であらうと、乃至また八十四銀行の前であらうと、そんな事を莫迦々々しく詳しく書く必要はない、蓋しさう

云ふことは、紙とインキの冗費に過ぎないからである。兎に角諸君は、午後四時頃の銀座尾張町附近の混雑の如何なるものであるかを、一寸想像して呉れ、ばそれで好い、そりや全く大變なものだ。俺みたいにポカンとして、電車の來往を奉迎送してゐる手合が、尠くとも戦時編制の一個中隊位はある、戦時編制の一個中隊で何のくらのだか知つてるかね？、實は俺とても……、なに知つてはゐるけれど其れア云へないよ軍事上の機密だもの、ヘン。電車の停車する毎に、此の中隊から決死隊の一團が現れて突貫する、而して悪戦苦闘の後、恰かも荷車に砂利でも積込まれたやうになつて、得々として運ばれてゆく、然し後から後からと押かけて來るから、何時まで經たとして

一個中隊は依然として一個中隊である。

俺だつて乗らうと思へば、其の勇氣に於て、將た其の腕力に於て、這んな有像無像を掻き退け突きこころばせて、突貫することは朝飯前だが、今日に限つてそれがインポシブルである、何故ツて下を見給へ下を、左様ぢや無いつたら自裂たいナ、靴だよ、靴だよ。今日は紳士の靴を穿いてるんだ、ホラ爪先は畏れ多くもエナメルだせ、ピカッと光つてるだらう、此の頃の麥畑のやうに無暗と踏みつけられることを以て光榮とする、そんなお安い靴ぢやないんだ。斯るが故に、俺は静かなること處女の如くにして、電車を待つてゐるんである。

雨上りで、ヒューヒュー寒い風が吹いて居た。何でも奴さん誰かに、

(吹き給へな、吹き給へな。一度び雨降れば泥濘膝を没すてふ東京の市に、君のやうな空ツ風があると云ふのは、天の配材も亦至妙と謂ふべしサ。此の泥濘を干し乾かすのは、君の天職なんぢやないか、夫れ然り、豈夫れ然らんや。)

でボンと背中を叩かれたに相違ない、それ故以て、

(解つてるヨ、心得てるヨ。)

と嬉しまぎれに、矢鱈無精と吹きまくつてゐるんだ、イヤハヤお蔭様で一同鼻の頭を眞赤に染めて嚏の連發だ。かゝる處へ、金の細い

洋杖を打振りつゝ現れ出でたるを誰とかなす、三百頭顱の中に斯かる人も有けりと知る人ぞ知る、代議士の横田君である。黒の山高を戴いて、金縁の鼻眼鏡をかけて、此の寒天に外套も着ないで、悠々と濶歩し來たる。代議士の癖に外套一枚持たぬのか知らと、餘計な心配を爲て呉れるな、此の君は洋行から歸つた當座は、冬も麥稈帽子を冠つて歩いた君である、俺は見るに見兼ねて、

(帽子の一つ位買つたら如何です。)

と忠告すると、外國の事情に通せぬ奴は仕様がないてな顔をして、

(外國ぢや皆な斯うなんだよ。)

と。俺は赤面して引退つたが、退いて熱々もんみるに、ちと平仄